

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 17 集

(広野廃寺・池山瓦窯跡)

1 9 9 1

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 17 集

(広野廃寺・池山瓦窯跡)

1 9 9 1

宇治市教育委員会



広野廃寺井戸SE01出土土器



広野廃寺調査地全景



(1) 広野廃寺井戸SE01土器出土状況



(2) 広野廃寺下層竪穴住居



(1) 池山瓦窯跡出土軒丸瓦Aa



(2) 池山瓦窯跡出土軒丸瓦Ab

序

宇治市教育委員会では、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に存在する重要な遺跡や緊急に保護・調査しなければならない遺跡に対して、昭和62年度より計画的に発掘調査を実施しております。

平成2年度では、内容が不明となっている古代寺院の広野廃寺と飛鳥時代の軒丸瓦が出土している池山瓦窯跡の発掘調査を実施しました。

広野廃寺では、寺域西端の築地跡や井戸跡・建物跡などの寺院関係遺構を検出し、さらに寺院下層に飛鳥時代の集落が存在することを確認しました。

池山瓦窯跡は、昭和61年に国の史跡指定を受けた埴上り瓦窯跡と同型の軒丸瓦が採集されていることから、新たな飛鳥時代瓦窯跡の検出を期待しましたが、残念ながら後世の土取りによって破壊を受けており、確認するに至りませんでした。

本書は、この2件の発掘調査成果を一冊にまとめたものであります。本書が広く宇治の歴史を知る機会となり文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたりご指導賜った関係者・調査に直接従事していただいたの方々に対して心よりのお礼を申し上げます。

平成3年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

1. 本書は、平成2年度宇治遺跡群発掘調査事業の概要報告書である。
2. 本書が収録する遺跡は下記のとおりである。

遺跡名称	種類	時代	調査地番	調査期間
広野廃寺	寺跡	白鳳・奈良	広野町東裏110-1	平成2年5月から6月
池山瓦窯跡	窯跡	飛鳥	菟道池山29	平成2年12月

3. 本発掘調査の経費は4,000,000円であり、文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその1/2を、京都府より文化財緊急保存費補助金としてその1/4をえた。
4. 本発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課 主事	杉本宏
	同	社会教育課 主事	荒川史
調査事務局	同	参事	頼成綾子
	同	社会教育課 課長	池田正彦
	同	社会教育課 文化係長	吉水利明
	同	社会教育課 主任	山本敦子
	同	社会教育課 主事	前田暢

5. 本発掘調査の事業実施にあたっては下記の機関・各位より調査指導をえた。
京都府教育庁文化財保護課・京都府立山城郷土資料館、杉原和雄（京都府教育庁文化財保護課記念物係長）・高橋美久二（京都府立山城郷土資料館長補佐）・中谷雅治（京都府埋蔵文化財調査研究センター次長）。〔順不同・敬称略〕。
6. 本発掘調査事業の参加者は下記のとおりである。
内田貴則・竹村充・志村みどり・長谷川陽子・山岡万里子・大槻倫子・小林利恵。
7. 本発掘調査事業の実施にあたって下記の間・各位のご協力を賜った。
城陽市教育委員会・三室戸寺・西村久雄・中川幹也。〔順不同・敬称略〕。
8. 調査期間中に下記の方々よりご教示をえた。
木村捷三郎・栗野 諤・大脇 潔・星野猷二・山田良三・近藤義行・中島 正。〔順不同・敬称略〕。
9. 本書が使用する遺構写真は主に杉本宏と荒川史の撮影によるものであり、遺物写真については寿福 滋の撮影によるものである。

10. 本書の編集は社会教育課が行い、編集実務については主に荒川史が行い、杉本宏がこれを補佐した。

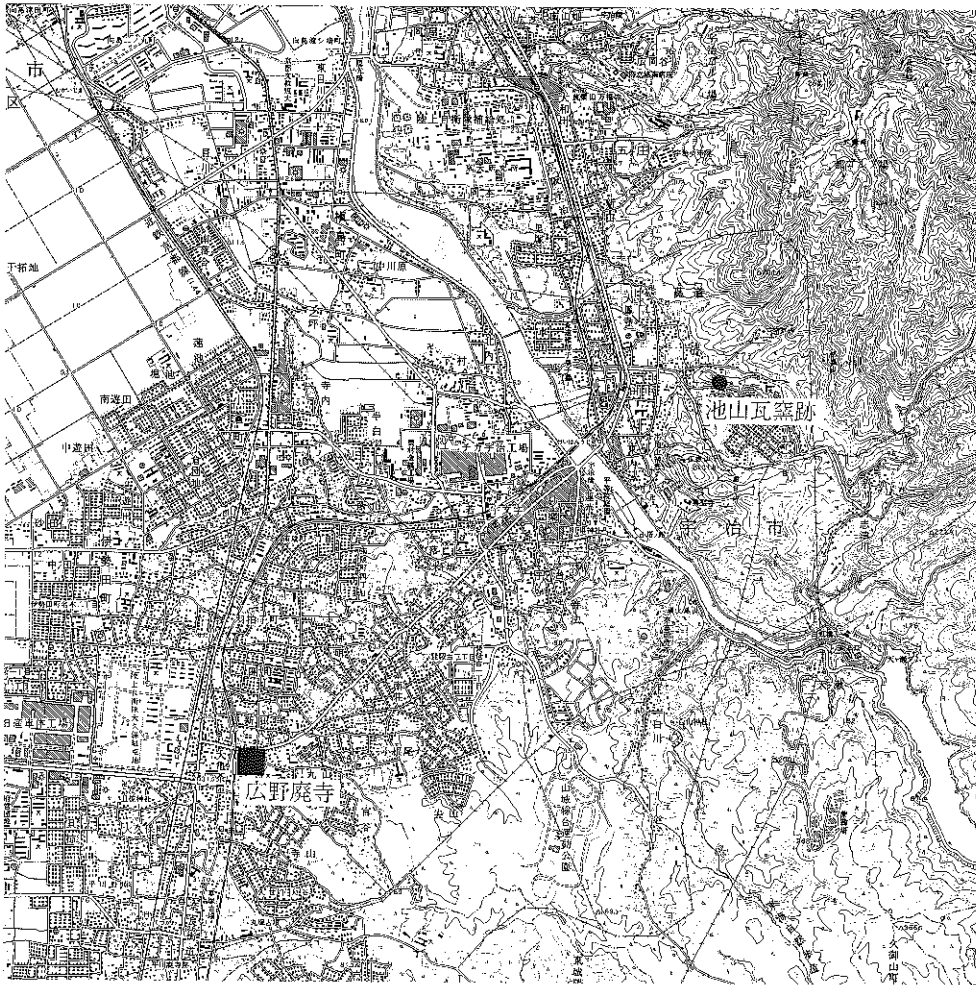
11. 本書の執筆分担は下記のとおりである。

杉本 宏…広野廃寺平成2年度発掘調査概要 1、3、6、7各章。

池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要。

荒川 史…広野廃寺平成2年度発掘調査概要 2、4、5、6、7各章。

12. 本書が収録する遺跡の位置は下図のとおりである。



調査遺跡位置図

本文目次

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 過去の調査と採集遺物	5
4. 調査の経過	8
5. 遺構	10
6. 遺物	19
7. まとめ	41

II. 池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要

1. はじめに	49
2. 池山瓦窯跡の発見と出土瓦	51
3. 調査の概要	55
4. まとめ	56

挿 図 目 次

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

第1図	広野廃寺周辺の地形	1
第2図	山城国主要古代寺院分布図	2
第3図	広野廃寺と周辺の遺跡	3
第4図	広野廃寺付近の古瓦出土地	6
第5図	広野廃寺採集の古瓦	7
第6図	トレンチ配置図	9
第7図	遺構平面図	11
第8図	土層断面柱状図	12
第9図	SD02・SD03・SD04・SH07実測図	12
第10図	SB10・SH06・SX11実測図	13
第11図	SB10実測図	14
第12図	SE01実測図	15
第13図	SH06実測図	16
第14図	SH08・SH09実測図	17
第15図	軒丸瓦実測図	20
第16図	平瓦A拓本(1)	22
第17図	平瓦A拓本(2)	23
第18図	平瓦B拓本	24
第19図	行基式丸瓦A拓本	25
第20図	行基式丸瓦A・B拓本	26
第21図	遺物実測図(1)	28
第22図	遺物実測図(2)	29
第23図	遺物実測図(3)	30
第24図	遺物実測図(4)	31
第25図	遺物実測図(5)	33
第26図	遺物実測図(6)	34

第27図	遺物実測図(7).....	35
第28図	遺物実測図(8).....	36
第29図	SE01出土土器器種一覧図(1).....	38
第30図	SE01出土土器器種一覧図(2).....	39
第31図	木津川右岸主要寺院軒丸瓦編年図(1).....	42
第32図	木津川右岸主要寺院軒丸瓦編年図(2).....	43
第33図	広野廃寺・広野遺跡範囲想定図.....	45

II. 池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要

第1図	池山瓦窯跡と周辺の主要遺跡.....	50
第2図	池山瓦窯跡付近旧状地形図.....	52
第3図	池山瓦窯跡採集軒丸瓦実測図.....	54
第4図	調査地位置図.....	55
第5図	隼上り瓦窯跡軒丸瓦C型式.....	56

表 目 次

表1	SE01出土土器の構成と技法.....	37
表2	SE01出土土器器種一覧表.....	37

図版目次

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|----------------------|
| 巻頭図版第1 | 広野廃寺井戸 SE01出土土器 | 巻頭図版第3 | (2) 広野廃寺下層竪穴住居 |
| 巻頭図版第2 | 広野廃寺調査地全景 | 巻頭図版第4 | (1) 池山瓦窯跡出土軒丸瓦
Aa |
| 巻頭図版第3 | (1) 広野廃寺井戸 SE01土器出土状況 | | (2) 池山瓦窯跡出土軒丸瓦
Ab |

広野廃寺

- | | | | |
|------|----------------------------|-------|-----------------------------|
| 図版第1 | (1) 調査地遠景 (南東から) | 図版第7 | (2) SE01下層掘削状況
(東から) |
| | (2) 調査地近景 (東から) | | |
| 図版第2 | (1) トレンチ全景 (西から) | 図版第8 | (1) SE01下層遺物出土状況
(西から) |
| | (2) トレンチ全景 (東から) | | (2) SE01下層掘削状況
(東から) |
| 図版第3 | (1) SD02遺物出土状況
(南から) | 図版第9 | (1) SD14全景 (南から) |
| | (2) SB10・SH06全景
(西から) | | (2) SD14断面 (北から) |
| 図版第4 | (1) SE01検出状況 (南から) | 図版第10 | (1) SH06遺物出土状況
(北から) |
| | (2) SE01上層掘削状況
(南から) | | (2) SH08・09掘削風景
(北西から) |
| 図版第5 | (1) SE01上層掘削状況
(南から) | 図版第11 | (1) SH08カマド全景
(南から) |
| | (2) SE01上層遺物出土状況
(東から) | | (2) SH08カマド内遺物出土状況
(南から) |
| 図版第6 | (1) SE01上層軒丸瓦出土状況
(東から) | 図版第12 | (1) SX11遺物出土状況
(南から) |
| | (2) SE01中層掘削状況
(東から) | | (2) G1瓦出土状況 (北から) |
| 図版第7 | (1) SE01中層掘削状況
(南から) | 図版第13 | 出土した軒丸瓦 |
| | | 図版第14 | 出土土器 (土師器) |

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|------------------|
| 図版第15 | 墨書土器 | 図版第19 | 出土土器 (須恵器) |
| 図版第16 | (1) 出土土器 (土師器甕) | 図版第20 | 出土土器 (須恵器) |
| | (2) 出土土器 (土師器甕) | 図版第21 | 出土土器 (須恵器) |
| 図版第17 | (1) 出土土器 (土師器) | 図版第22 | (1) 出土土器・鉄器 |
| | (2) 出土土器 | | (2) 出土土器 (須恵器羽釜) |
| | (黒色土器・緑釉陶器) | 図版第23 | 出土土器 (土師器・須恵器) |
| 図版第18 | 出土土器 (須恵器) | | |

池山瓦窯跡

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|------------------|
| 図版第24 | (1) 調査地遠景 (東から) | 図版第25 | (1) トレンチ全景 (東から) |
| | (2) 調査地近景 (東から) | | (2) 瓦窯跡発見時採集の軒丸瓦 |

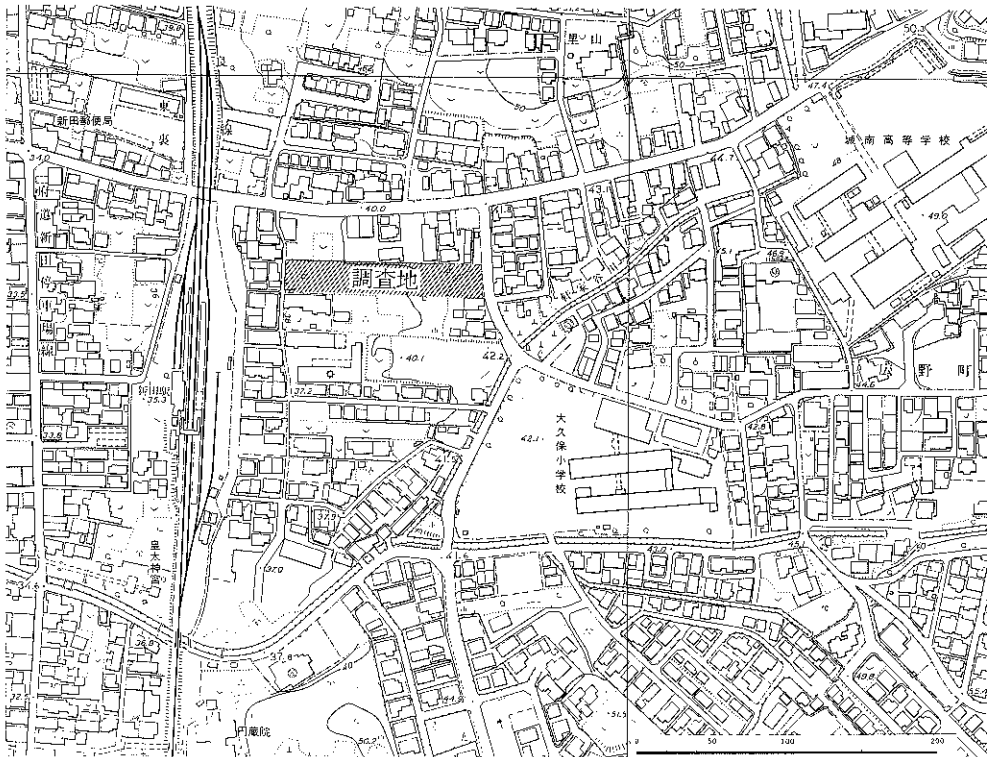
I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

1. はじめに

ひろの
 広野廃寺は、宇治市広野町東裏一帯に広がる白鳳期創建の古代寺院跡である。現在、宇治市内における白鳳期建立の寺跡は、市東部の旧宇治郡域に大鳳寺跡及び岡本廃寺の2寺跡と市西部の旧久世郡域に広野廃寺の3寺跡が知られている。広野廃寺の現況は、宅地・茶畑・竹藪等であるが、近年、その周辺部において急速に宅地化が進行している。

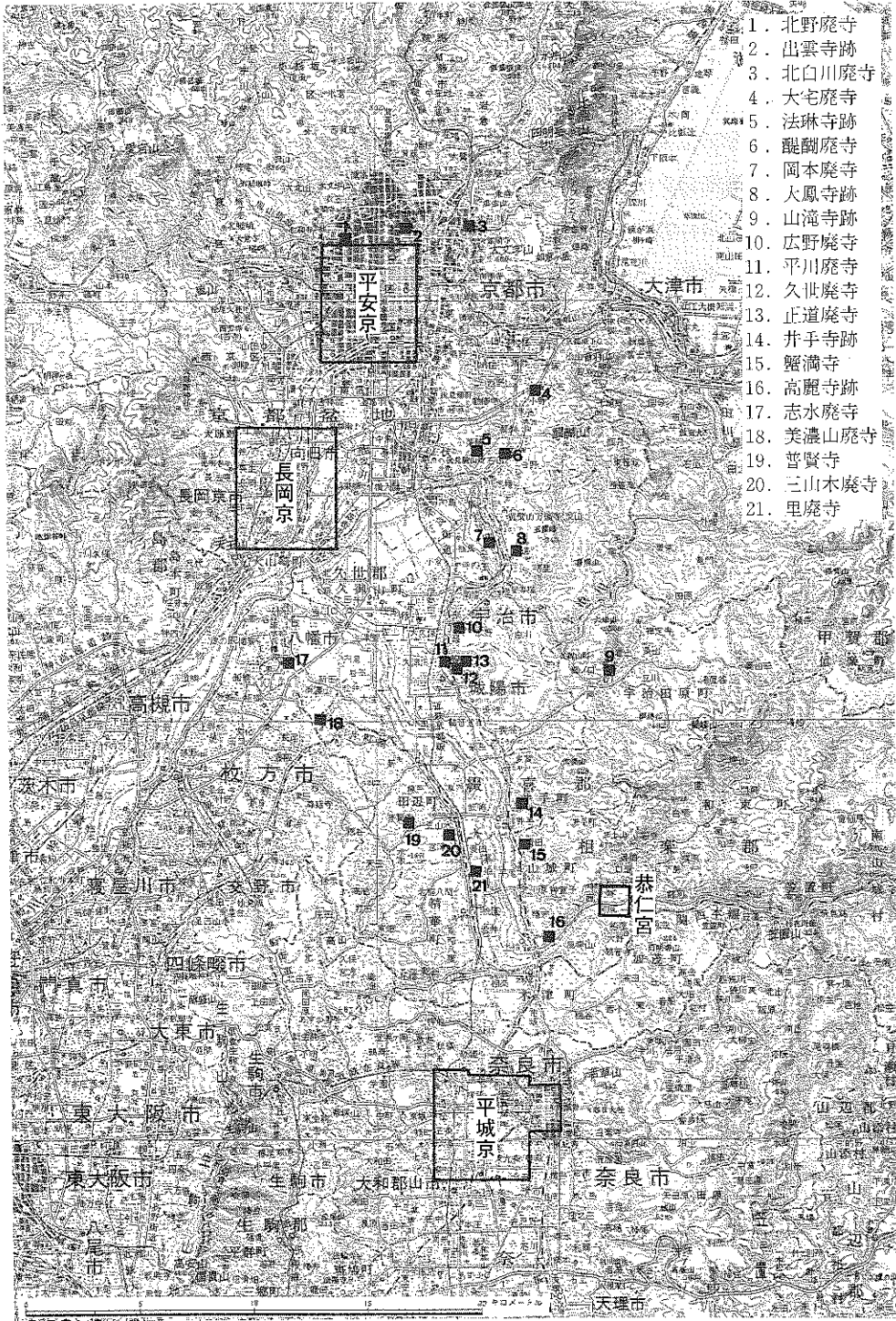
後述するとおり、広野廃寺の発掘調査は過去に2回程実施されているが、いずれも小規模なもので、寺院に関係する遺構の検出はされていない。したがって、本年度の調査を実施するまでの当寺跡の範囲は、地形及び古瓦の散布状況により概ねの範囲を想定するに留まっており、その具体的内容は不明のままとなっていた。このような状況から、本市教育委員会では土地所有者の西村久雄氏のご協力を得て、広野町東裏110-1において範囲確認を中心とする発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の現地調査は、平成2年5月10日から同年6月29日までであり、発掘調査面積は約400㎡である。



第1図 広野廃寺周辺の地形

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



第2図 山城国主要古代寺院分布図

2. 位置と環境

A. 地理的環境

広野廃寺の存在する広野町周辺は、西に向かってゆるやかに傾斜する宇治丘陵の末端付近に位置する。そして、この宇治丘陵は、この傾斜に従って流れでる小河川によって侵食され、いくつかの西方にのびる小支丘を形成する。広野廃寺はこのような小支丘の南側緩斜面に位置する。

B. 歴史的環境

広野廃寺周辺では、前述した小支丘上に多くの遺跡が分布している。この宇治丘陵から西方に広がる大久保町周辺の沖積平野では、小河川による厚い堆積物のあることと、比較的開発が早い段階に行われたため遺跡の状況はよくわかっていない。

広野廃寺周辺では現在のところ縄文時代・弥生時代の遺跡はあまり知られていない。しかし古墳時代に入ると、宇治西部としては最も古墳の集中する地域となる。

古墳時代前期では、広野廃寺の東約600mのところ^{註1}に庵寺山古墳が築造される。庵寺山古墳は、直径56mの円墳で、京都大学所蔵の蓋形埴輪や靱形埴輪で著名である。平成元年度に



第3図 広野廃寺と周辺の遺跡

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

宇治市教育委員会が盗掘墳の調査を行い、埋葬施設は粘土槨であることを確認し、家型埴輪などの形象埴輪や鱗付円筒埴輪が出土している。

広野廃寺の南、三軒屋川の小谷を隔てたところには金比羅山古墳^{註2}がある。昭和39年に調査されており、直径45mの円墳で、埋葬施設は粘土槨であった。粘土槨からは舶載二神二獣鏡・玉類・剣・農工具等が出土している。また粘土槨に並んで1基、墳裾に4基の円筒埴輪棺が出土している。庵寺山古墳とはほぼ同時期の古墳と考えられている。

金比羅山古墳に隣接して、6世紀代には坊主山古墳群^{註3}が築造される。このうち1号墳と2号墳が昭和39年に発掘調査されている。坊主山1号墳は、全長45mの前方後円墳で、組合式木棺を直葬していた。棺内からは、玉類・銅釧・三輪玉装太刀・矛・鉄鏃・胡録・杏葉等が出土している。坊主山2号墳は、直径25mの円墳で、1号墳と同様に組合式木棺を2基埋葬していた。棺内からは、銅環・鉄環・玉類・鉄鏃・金環・馬具・須恵器等が出土している。3号墳は未調査で、内容は不明である。

広野廃寺の東には埴輪列の存在が知られる一里山古墳^{註4}、古墳時代前期に遡る埴輪が採集されている一里山東1号墳、須恵器が出土している一里山東2号墳^{註5}などがあるが、すでに消滅しておりその全容は知るべきがない。

広野廃寺の北500mには伊勢田塚^{註6}があり、昭和47年に伊勢田塚調査会によって調査されている。ここからは7世紀代の陶棺が出土している。

遺跡では、寺域の北に隣接して一里山遺跡がある。過去に調査が行われていないため詳細は不明であるが、主に奈良時代の土器が散布しており、広野廃寺との何らかの関係が考えられる。

近世になると、広野周辺では淀藩による新田開発^{註7}が行われる。これは寛永10年(1633)から行われたもので、現在ではJR新田駅にその名を留めている。調査地西側の集落はこの新田開発に伴って形成された集落で、調査地の狭長な地割りは集落の各戸に分割されたことによる。広野廃寺では、基壇などの痕跡をまったく留めていないが、この新田開発の際に大きく地形の変更が行われたものと思われる。

3. 過去の調査と採集遺物

(広野廃寺発見の契機)

広野廃寺の存在が知られるようになったのは、昭和19年、宇佐晋一氏が広野町東裏で古瓦数点を採集され、当地に古代寺院の存在を予測されたのが、そもそもの契機であったという。

昭和29年に至り、府道宇治大久保線の舗装工事時において、広野町東裏の部分で多量の古瓦が出土し、古代寺院の存在がほぼ確定的となった。この時出土した瓦については、付近に在住の栗野謨氏が所有されている。

この時点での広野廃寺は、広範囲に多量の瓦の散布が認められるという事から、東裏一帯に古代寺院の存在が想定されたに留まっており、地形的にも基壇等を予想させる土壇状の高まりが付近に存在しないため、その具体的内容については不明のままであった。

(過去の調査)

広野廃寺の考古学的発掘調査は、本年度の発掘調査までに2回実施されている。

最初の発掘調査は、昭和42年に、京都府立城南高等学校地歴部(担当山田良三氏)が本年度発掘調査地の北側の東裏108-4番地で実施したものである。この調査では、寺院に関する遺構の検出はなかったという。

2回目の発掘調査は、昭和46年に宇治市史編纂委員会によって山田良三氏を中心に実施されたものである。調査地は、今回の調査地と同じ東裏110番地である。調査は、当地の北側地境にそって3mグリッドを10~20m間隔で3箇所設定し実施されており、東側のグリッドから瓦堆積と柱穴、ほかのグリッドから柱穴を検出している。しかし、これらの柱穴が寺院に関係するか否かは不明であるといい、瓦堆積の確認から付近に主要建物を想定するに留まっている。出土遺物は、軒丸瓦片2点(軒丸瓦A)を始めとする瓦類・土師器・須恵器・瓦器そして刀子等である。この調査成果は、『宇治市史』第1巻^{註8}に詳しい。

(古瓦の出土状況と種類)

広野廃寺付近での古瓦の出土状況については、最近、栗野謨氏が報告^{註9}をされているので、その内容を略記することとしたい。

本年度の調査が実施されるまで、工事等によって古瓦の出土が確認できた地点は第4図のA~D地点であるという。A地点は、通称「カワラガマ」と呼ばれる所であり、以前より古瓦の堆積が認められたという。B・C地点は、前述した昭和29年の府道工事に伴い古瓦の散布が認められた場所であり、D地点は府道工事に伴う残土を古瓦とともに盛土した場所であるという。E地点は、昭和42年頃に道路工事をした際、古瓦が多く出土した場所であるとい

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

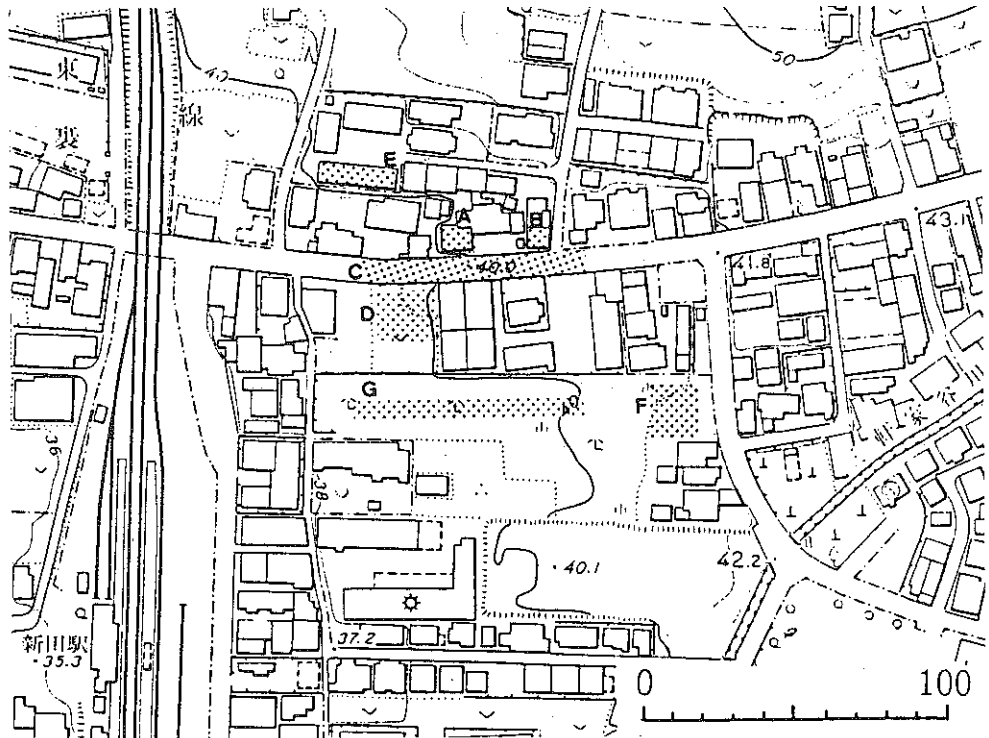
う。このA-D地点のうち、A・B・Eは南へ下がる丘陵斜面に相当し、寺の主要建物を構築するには余り良い場所とは思われない。ここでどのような瓦が出土したのか確認できないが、地元でA地点付近を「カワラガマ」と通称する事は注意に値しよう。

これらの地点から今までに採集されている軒瓦は、軒丸瓦が2種類、軒平瓦が1種ある。

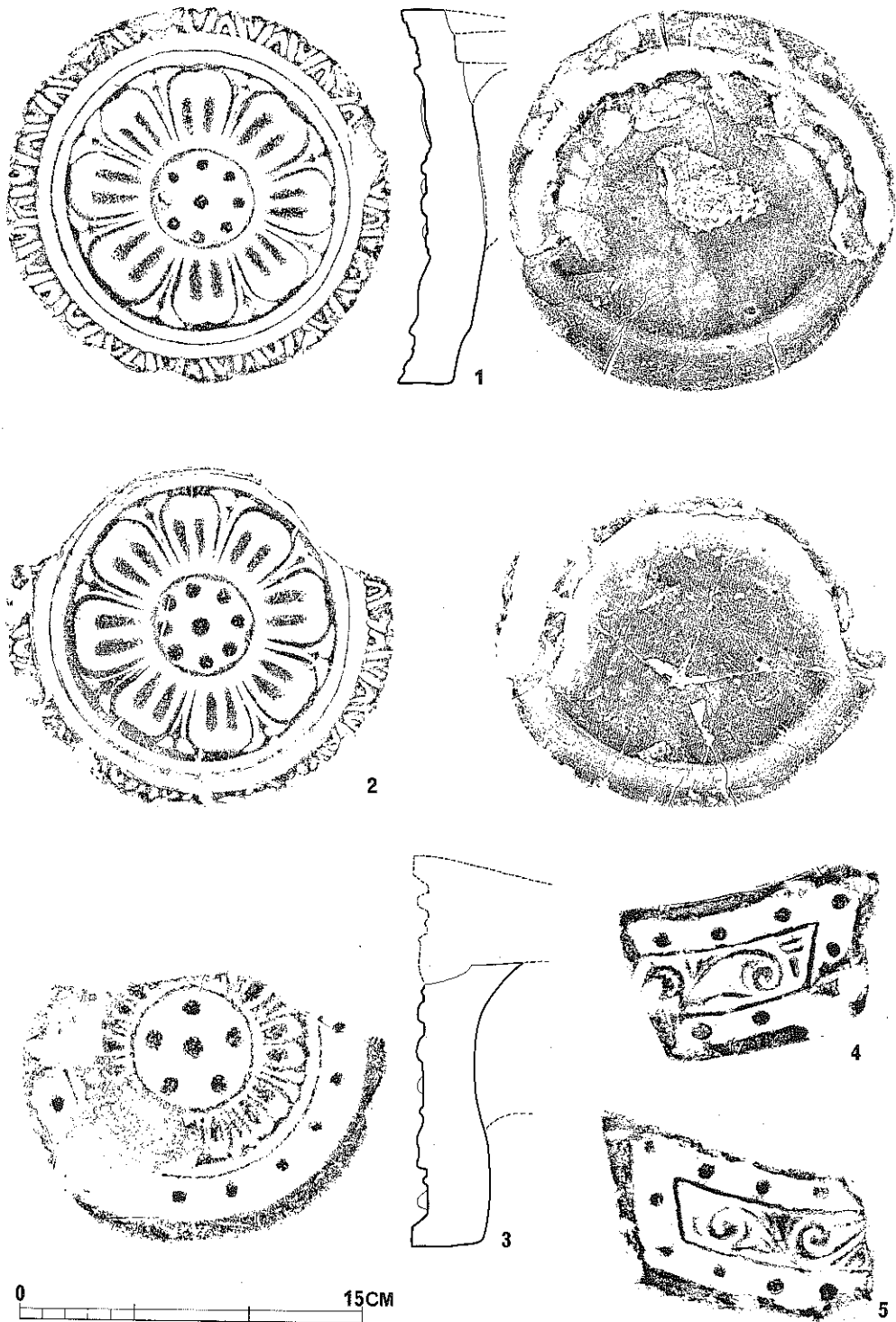
軒丸瓦の1種（第4図1・2）は、川原寺垂式とされるもので、白鳳期に比定できる。本書のいう軒丸瓦Aと同範であり、現在までに7点程が採集されている。もう1種（3）は、本書のいう軒丸瓦Bと同範であり、奈良時代のものである。平城宮出土軒瓦型式の6235-Bと同範と思われる。現在までに2点程が採集されている。

軒平瓦（4・5）は、以前に栗野氏が府立城南高等学校の資料室にあった広野廃寺出土とされるものを採拓されたもので、現在は現品の所在が不明であるという。拓本を見る限り、平城宮6763-Aに極めて類似している。他に軒平瓦片が数点出土しているが、いずれも、断片であり、文様を判じえない。

他に、平瓦の凸面に文字をヘラ描きしたものが出土しているが、文字の多くの部分を欠失しているため判読できない。



第4図 広野廃寺付近の古瓦出土地（註9より）



第5図 広野廃寺採集の古瓦 (1～3：栗野謨氏蔵、4・5：城南高等学校蔵)

4. 調査の経過

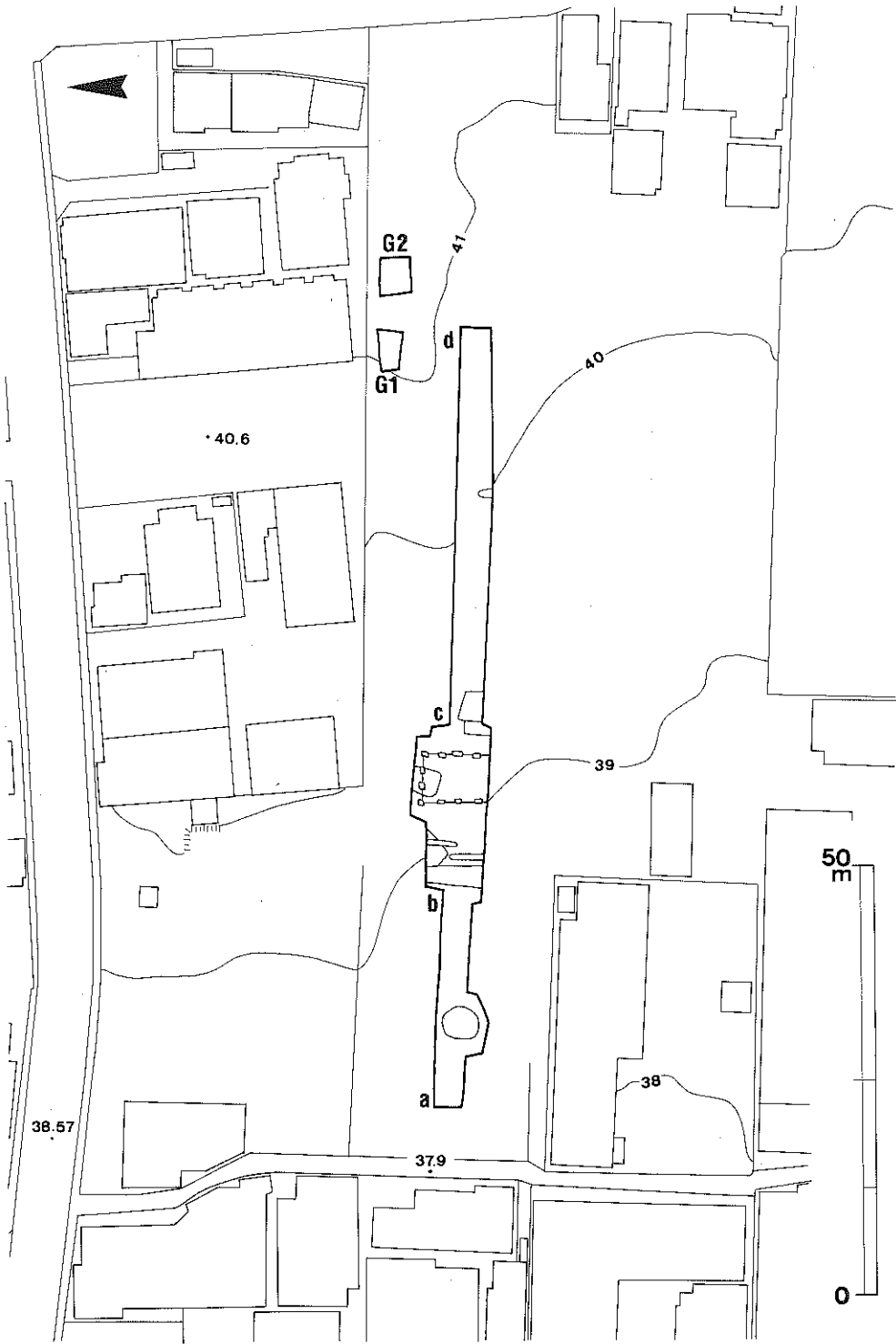
現地調査は、平成2年5月10日から開始した。トレンチの設定は、調査地が狭長であるため3m×90mとし、遺構の検出状況により随時拡張することとした。調査前の段階では、広野廃寺の範囲が調査地の東西をはしる南北方向の道路と、北側の府道によって囲まれた地点と推測されていたため、このトレンチの中で東西の廻廊の一部と中心建物を検出することが予想された。掘削は重機によって西側から行ったが、この段階でSE01など遺構の存在が明らかになったものについては拡張を行いながら掘削した。この重機掘削の際に、トレンチ西半部では表土下約30cmで地山を検出したが、東半部では地山層が約2.4m程下がることが判明した。検討の結果、微地形の起伏を整地しているものと判断し、ほぼ同レベルの層で面を迫っていった。重機掘削は2日間で終了し、その後はトレンチ西部から精査を行った。

精査作業と並行して、水準点測量及び基準点測量を行った。水準点は久保小学校内にある宇治市公共水準点 No. 25 (41.825m) を利用した。基準点は宇治市建設部が設置した既知点2点を使用し、調査地入り口に基準点を設定した。この基準点の座標は $X = -125,142.516$ 、 $Y = -19,595.839$ である。閉合比は1/19,000であった。

調査は、遺構密度の高いトレンチ西半部から進めた。この部分では井戸・南北方向の溝・掘立柱建物・竪穴式住居・土壙などを検出した。この内南北方向の溝については、溝の方向がほぼ真南北を向いていることや、溝内の遺物が奈良時代以前のものであることから、寺院に関連する遺構と考えられた。そして西側に井戸があり、他の寺院の調査例築地内では井戸の検出例がないことから、南北方向の溝が寺院の西側築地側溝にあたり、寺域の西側に寺域外諸堂があるものと判断した。井戸 SE01については、約3mまで掘削を行ったが底に達せず、崩壊の危険が予想されたため、調査を中断せざるを得なかった。

この段階で寺域の西限が確定できたため、トレンチ東半部で寺の中心建物を検出する可能性が考えられたが、東半部では瓦の出土量も少なく、溝を検出したのみであった。そこで、市史編纂に伴う調査で瓦の堆積が認められた調査地の北部で、G1とG2の2つのグリッドを設定し、中心建物の検出を試みた。しかしここでも若干の瓦の堆積は認められたものの、中心建物と思われる遺構の検出はなく、調査地のさらに北側に存在する可能性が考えられた。なお、トレンチ東半部の地山の落ち込みは、この部分に北東から南西に走る小さな谷があり、これを埋めているためと判明した。

作業員による掘削作業は6月28日まで行い、写真撮影及び遺構実測は適宜行った。埋め戻し作業は重機によって6月28・29日の2日間で行い、全ての作業を終了した。



第6図 トレンチ配置図

5. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、大別して3時期のものがある。すなわち寺院に関連する遺構・寺院創建以前の遺構・寺院廃絶以後の遺構である。以下調査地の基本層位と各遺構についてそれぞれの時期ごとに述べていきたい。

A. 基本層位

遺跡を覆う土層については、今回のトレンチが東西に長くまた調査前の比高がトレンチ東端と西端で約1.8mあるため、一様ではない。(第8図) 最も単純な層位を示す地点(b地点)では、表土、暗褐色土、地山の赤褐色土の順である。この1層と2層はトレンチのすべての地点で確認でき、2層は近世以降の堆積と考えられる。

トレンチ西端では、自然地形の傾斜にしたがって下がってゆき、2層と地山の間に褐色土層、褐色砂礫層、暗褐色粘土質土層が入る。ピット等の遺構を褐色土層上面で検出しており、この3層は整地層であることがわかった。

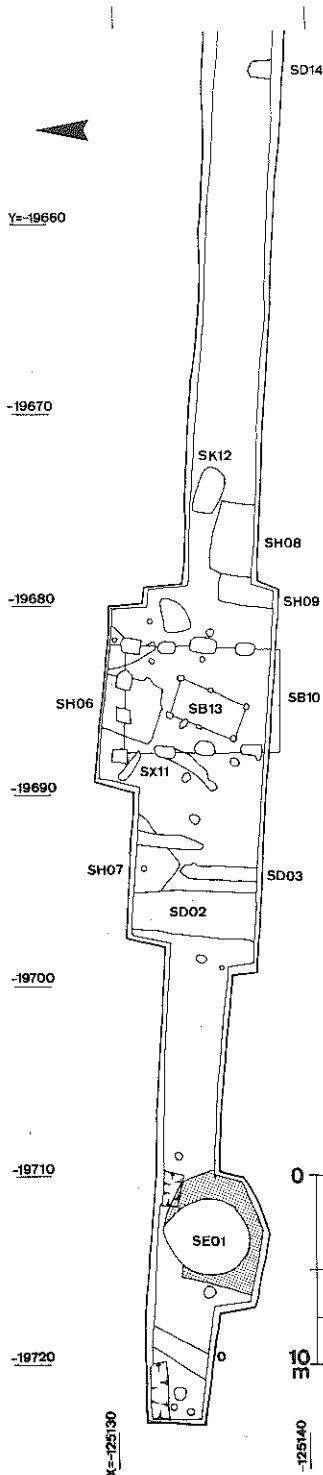
トレンチ東半部では、基盤地形の傾斜に反して地山が下がっていく状況が観察できた。そして、c地点では2層の下層に黄褐色土、暗褐色土、淡黒褐色土が、d地点では黄褐色土、暗褐色土、淡黒褐色土、暗灰色土、褐色粘質土、暗褐色砂礫が堆積していた。このうちc地点周辺では淡黒褐色土層上面で、d地点周辺では褐色粘質土層上面で寺院に関連すると考えられる遺構を検出しているため、これらの層から下層が整地層と判断された。この整地層の上層の堆積状況であるが、c・d地点で見られる黄褐色土層は、北東から南西の方向にレンズ状に堆積しており、河川の氾濫などに伴う堆積層と考えられる。この黄褐色土層の下層の成因は不明であるが、瓦器片を含み中世以降の堆積である。

これらの整地層上層の堆積状況や土山の状況から推察すると、トレンチ東半部は寺が成立する以前には北東から南西方向の小さな谷が走っており、それを埋めて寺院を建立したものであると思われる。そして、寺院廃絶以後、地山と比較して弱い整地部分に、河川の氾濫等による土砂が堆積しやすい状態になっていたものと思われる。

B. 寺院に関連する遺構

寺院に関連する遺構としては、溝・掘立柱建物・井戸・土塋・ピットがある。以下各遺構について述べていきたい。

溝 SD02 トレンチ中央部からやや西寄りで見出した南北方向の溝である。幅約2～2.5m、深さ約0.2mを測る浅い溝である。溝の底面は舟底状を呈する。トレンチの幅が狭いため正確な方向の振れを読むことは難しいが、検出した範囲内では3度ほど東に振れている。



第7図 遺構平面図

溝内から出土した遺物はほとんどが奈良時代の瓦類で、須恵器が若干量混じる。溝の方向がほぼ真南北を向く点、東側にこれと平行するSD04がある点、西側に井戸がある点などから、このSD02が寺域の西側を限る築地側溝と判断した。

溝SD03 SD02の東にある溝である。幅約0.8m、深さは最も深い所で0.08mである。検出した長さは約3.5mであるが、北に向かって徐々に浅くなり、トレンチ中央付近で検出不能となった。溝内からは瓦が出土している。

溝SD04 SD03の東にある溝である。幅約0.6m～0.8m、深さ約0.15mを測る。検出した長さは約3.5mである。SD02とほぼ平行であり、この溝が対応して築地を形成するものと思われる。溝内からは瓦が出土している。

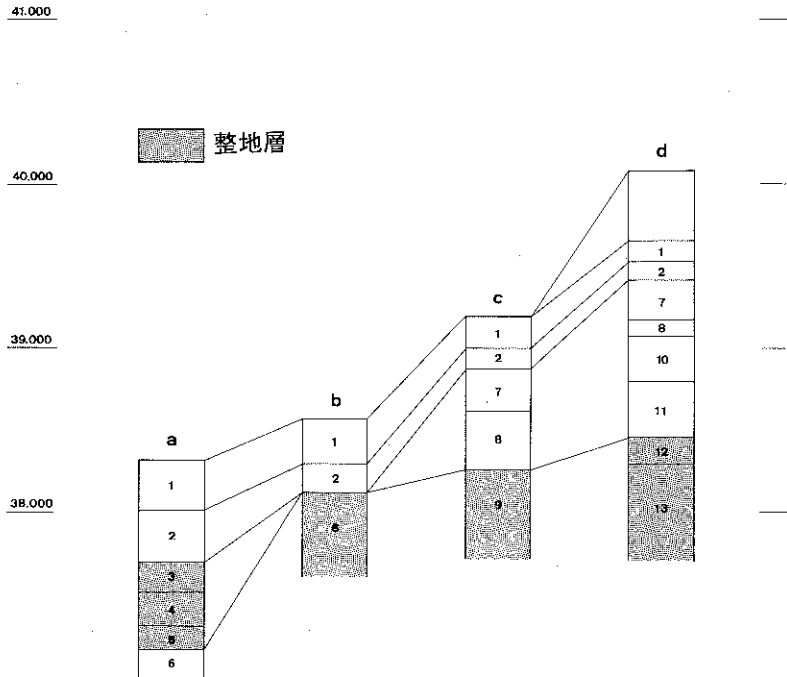
掘立柱建物SB10 SD04から約4m東にある掘立柱建物である。トレンチ内で検出できたのは3間×3間で、さらに南にのびることがわかっていたが、排土等の関係でトレンチの拡張が困難であった。このため埋め戻しの際に重機によって建物の南側を拡張したところ、柱穴の並びを確認することができ、3間×4間の建物であることがわかった。

梁間全長約5.7m、桁行検出全長は、東側で6.3m、西側で6.6mである。南側の1間分を加えると、桁行全長は8.5m前後になるものと思われる。それぞれの柱間の長さは1.8m～2.3mで一様ではないが、2m程度が最も多い。

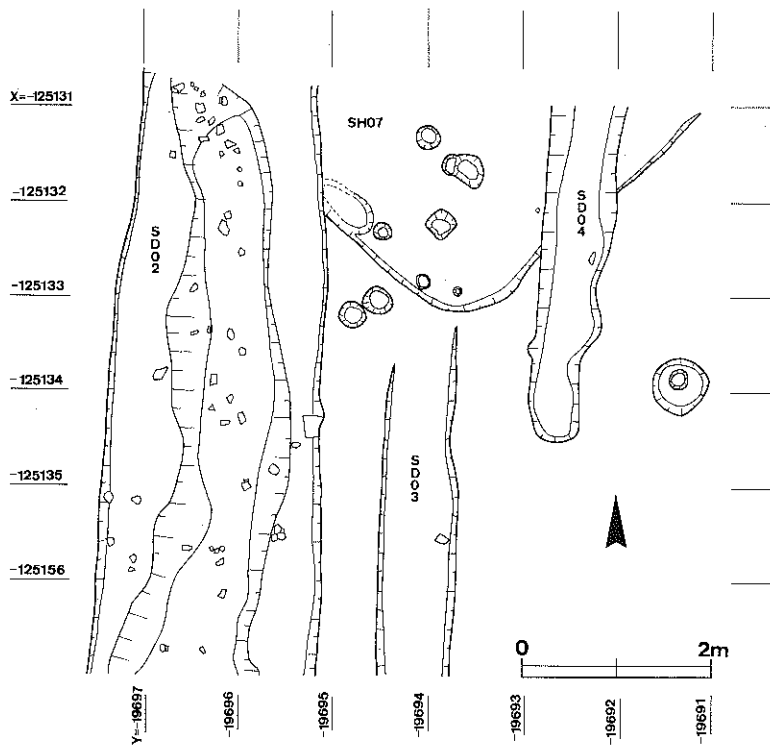
柱穴の掘方は、一辺0.6m～1.4mの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、0.2m～0.3mの柱痕が残る。4基の柱穴で抜き取り痕を検出している。掘方の深さは0.3m～0.5mである。

井戸SE01 SD02の西方約15mのところにある井

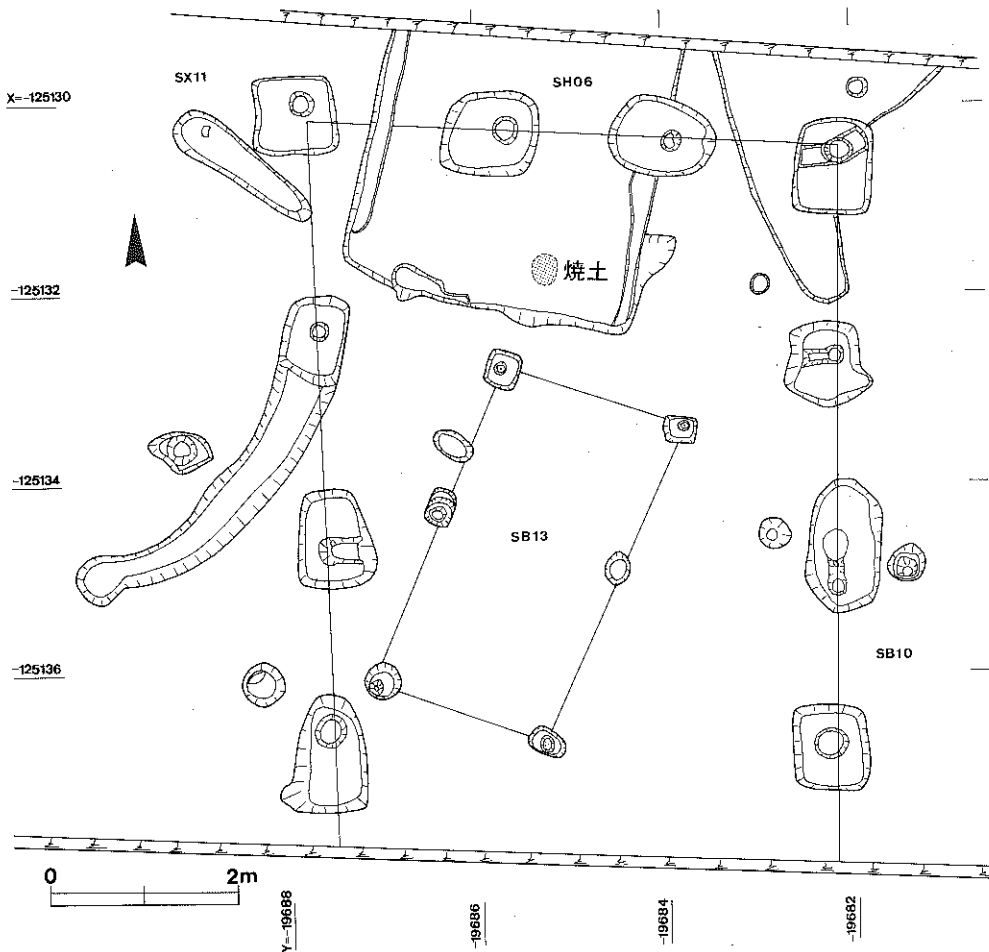
I. 広野麿寺平成2年度発掘調査概要



第8図 土層断面柱状図



第9図 SD02・SD03・SD04・SH07実測図



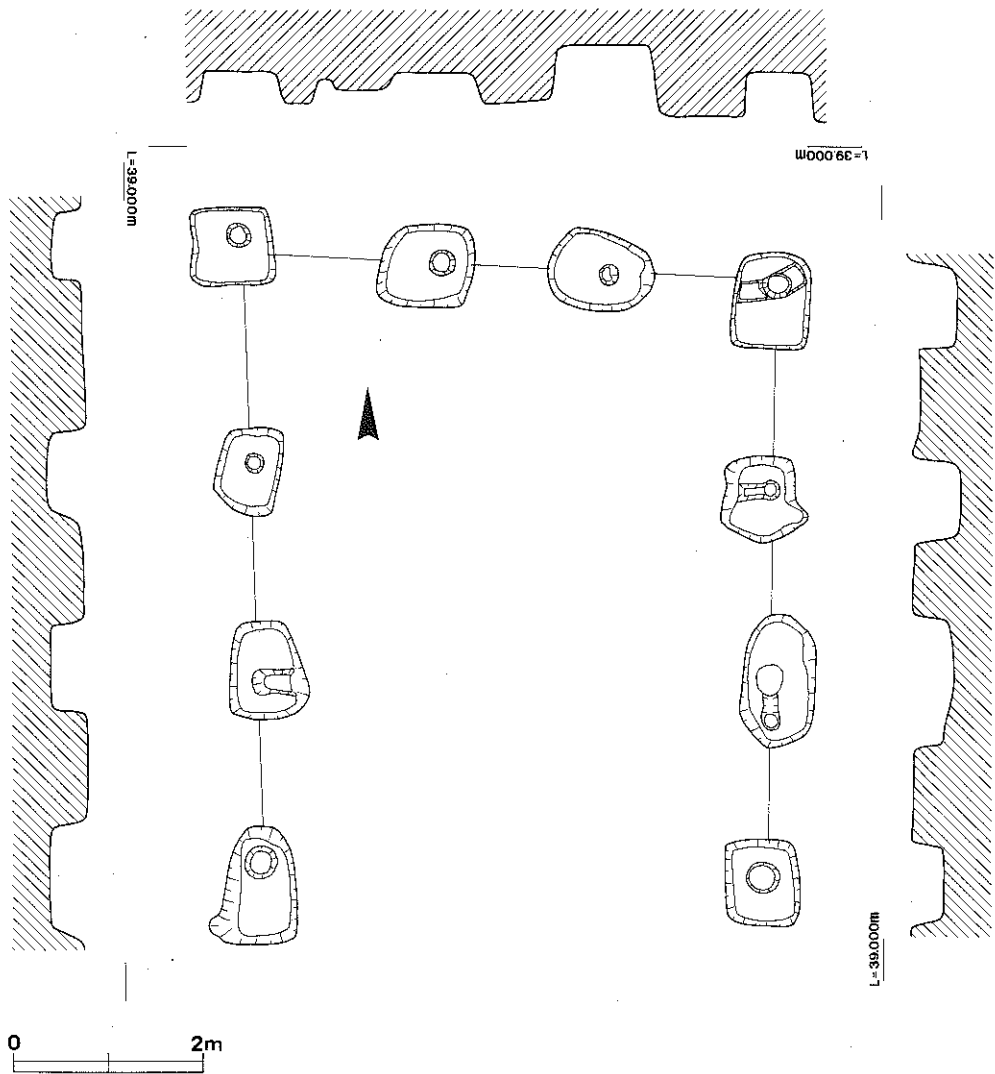
第10図 SB10・SH06・SX11実測図

戸である。ここからは大量の土器類・瓦類が出土しており、今回の広野廃寺での出土遺物の8割程度を占める。

掘方は西辺は直線をなし方形に近いが、東辺は弧を描いている。東西の最大幅は約6mである。黄褐色の砂礫で埋め戻されている。この井戸については、約3mまで人力で掘削を行ったが、土砂崩壊の危険が予想されたため途中で中断し、トレンチ埋め戻しの際に重機で半裁しながら約5mまで掘削したが、掘方内が砂礫のため土砂崩壊が著しく断念せざるをえなかった。従って掘方の深さは5m以上あることのみ確認できた。

井戸枠は深さ1.4mまでが抜き取られており、その抜き取り痕は遺構検出面で直径4.1mを測る。井戸枠を抜き取った後、瓦・土器・礫などを投棄して埋め戻している。これらの遺物の投棄は主に西側からなされており、東側からの流入土にはあまり遺物を含まない。また、西側からの流入土は3層に分層でき、少なくとも3段階に分けて投棄されたものと思われる。

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

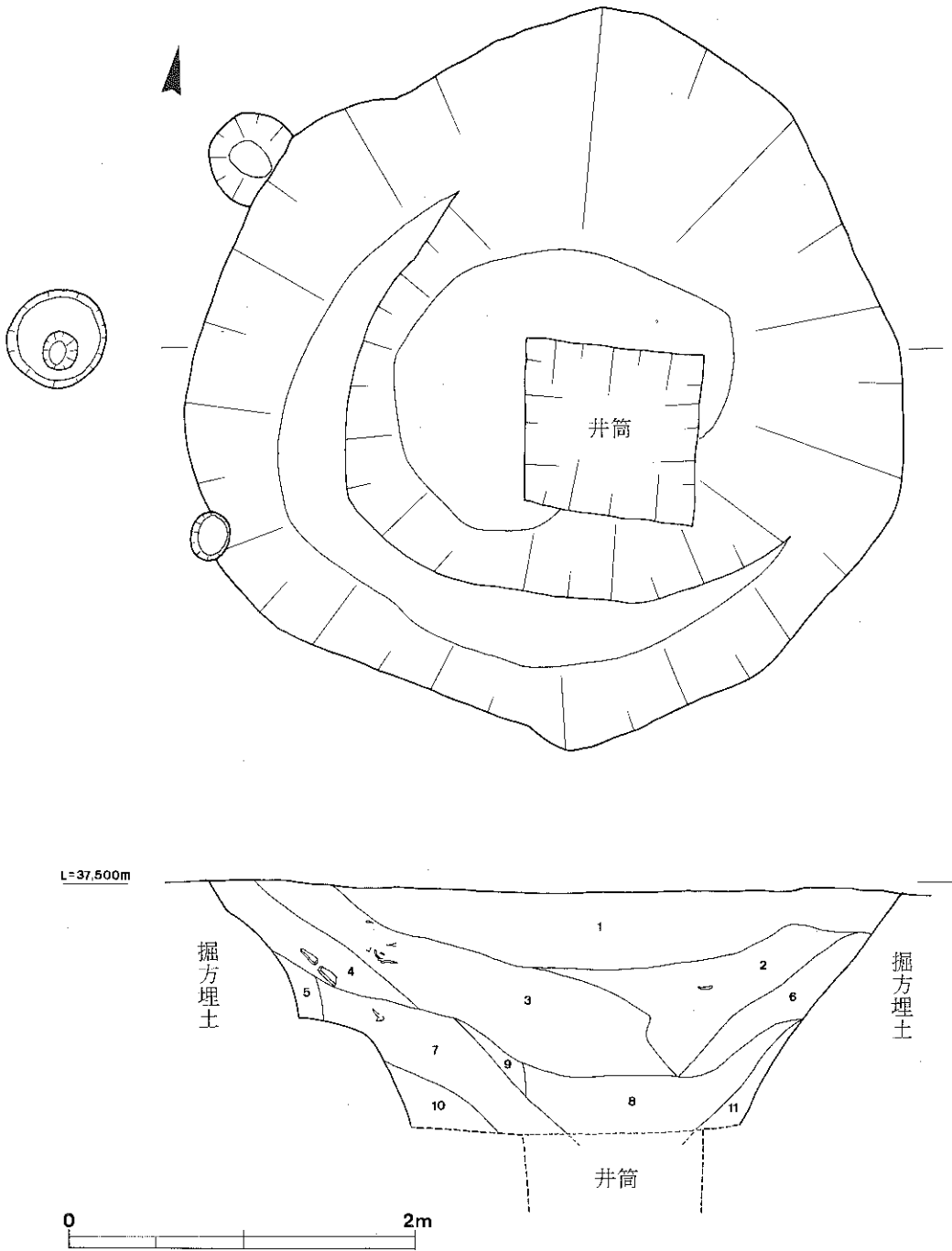


第11図 SB10実測図

この投棄の途中には廃材などの焼却も行われたようで、抜き取り痕北側では焼土を検出した。しかし、上層出土の遺物と下層出土の遺物で接合する資料もあることから、各段階の時期差はほとんど無いものと思われる。

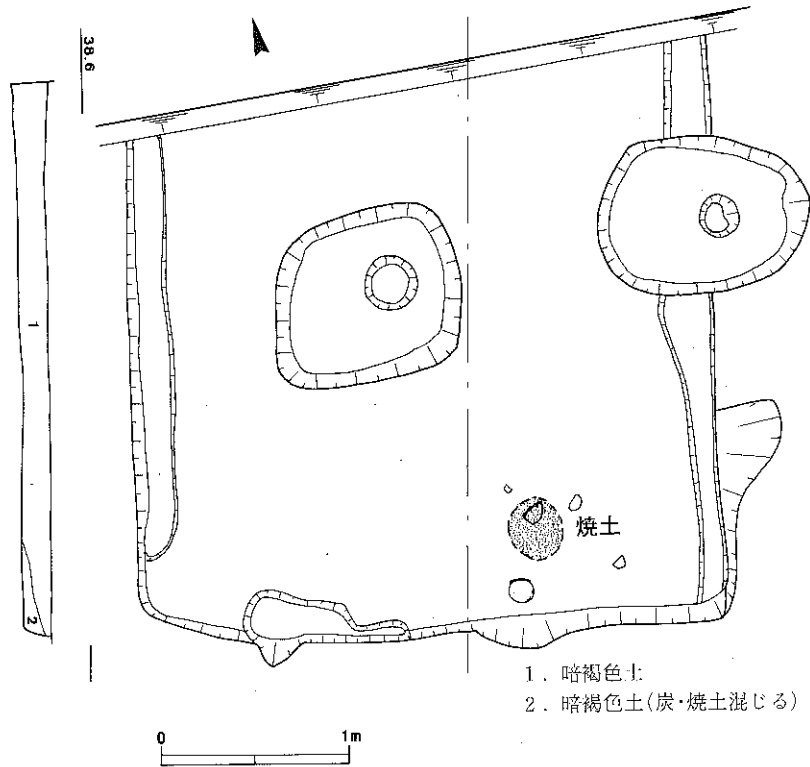
抜き取り痕から下層では、井戸枠はすでに腐朽しており、遺構検出面から深さ約5 mのところの一部が残存していたのみであるが、掘方埋土との土質の違いから、井戸枠外法が一辺約1 mの方形の井戸であることがわかった。

井戸の周辺では、抜き取り痕によって切られているものもあるが、3基のピットを検出しており、覆屋をもっていた可能性もある。



第12図 SE01実測図

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



第13図 SH06実測図

土壌 SK11 SB10の東にある菱形の土壌である。一辺約1.2m、深さ約0.07mを測る。断面は舟底状を呈する。性格は不明である。

土壌 SK12 SH08の北西に隣接する長方形の土壌である。長辺1.4m、短辺1.3m、深さ0.25mを測る。埋土からは炭化物の層を検出している。

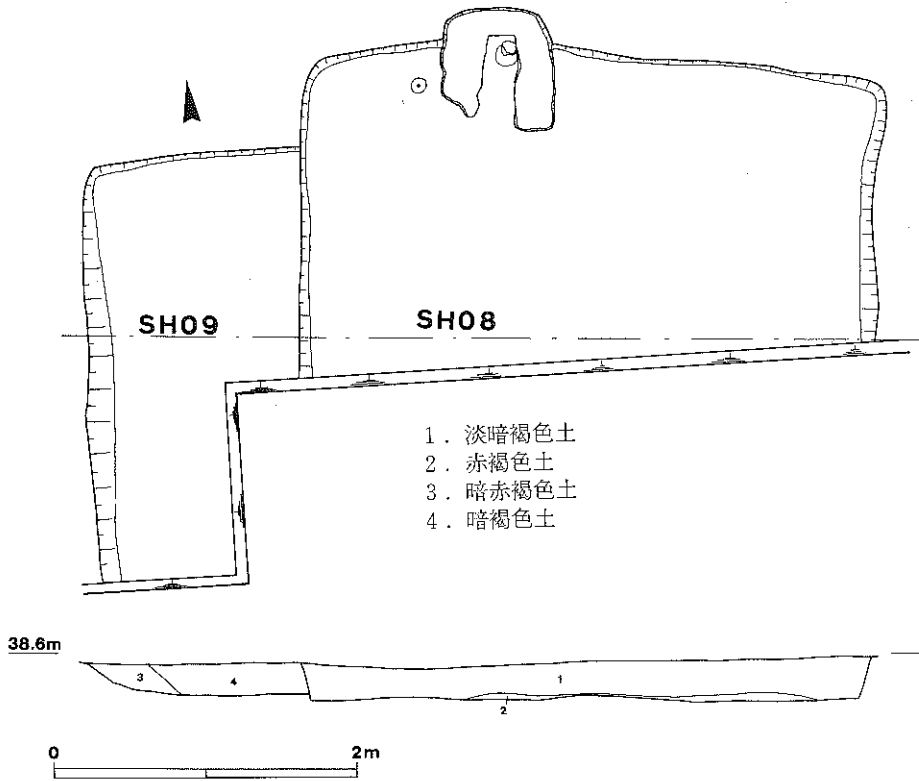
溝 SD14 トレンチ東部で検出した溝である。検出長0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は礫と瓦で充填されていた。暗渠排水と考えられる。

C. 寺院創建以前の遺構

寺院創建以前の遺構としては、竪穴式住居を4棟と土壌1基を検出している。以下各遺構について述べる。

竪穴式住居 SH06 SB10に切られた状態で検出した。一部がトレンチの外に出るため全容は不明であるが、隅丸方形の竪穴式住居で、東西3.1m、南北3.1m以上、深さ約0.2mを測る。部分的に幅約15cmの壁溝が残る。柱穴は検出していない。南辺の壁よりで焼土を検出しており、炉があったものと思われる。

出土遺物は、土師器・須恵器がある。このうち土師器の完形の甕が、炉のすぐ横から伏せ



第14図 SH08・SH09実測図

た状態で出土している。これらの遺物から、住居の時期は7世紀前半と考えられる。

竪穴式住居 SH07 SD02とSD04に切られた状態で検出した。南コーナーを検出したのみであるため、全体の規模は不明である。方形の竪穴式住居で、残存する壁高は15cmである。小ピットを6基検出しており、いずれかが柱穴となる可能性がある。

竪穴式住居 SH08 SB10の東方で検出した方形の竪穴式住居である。東西約3.8m、残存高約0.2mを測る。柱穴は検出していない。北辺の中央からやや西寄りで造りつけのカマドを持つ。ほぼ方形で、幅0.7m、長さ0.75m、高さ0.15mが残る。カマド内には完形の土器の甕が伏せた状態で置かれていた。土器の火の受け具合が通常の使用状態程度であるため、台として置かれたものではなく何らかの祭祀的な意味を持っているものと思われる。この甕の他には、TK217型式の須恵器の杯蓋が床面に密着した状態で出土している。この遺物から判断すると、7世紀前半の住居と考えられる。

竪穴式住居 SH09 SH08の西にあり、大部分をSH08に切られている方形の竪穴式住居である。残存壁高0.2m。床面からTK217型式の杯身が出土している。

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

D. 寺院廃絶以後の遺構

掘立柱建物 SB13 SB10に重なる位置で検出した1間×2間の掘立柱建物である。桁行3.6m、梁間1.9mを測る。柱穴埋土は黒褐色を呈し、他の遺構埋土と明確に判別できた。柱穴は方形もしくは円形で、一辺約0.4mを測る。柱穴内からは遺物は出土していないが、包含層から瓦器の出土をみているため、中世の建物と思われる。

6. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、瓦類・土器類が主で他に少量の鉄器類がある。出土量は、コンテナバットに50箱分程である。

以下に瓦類・土器類・鉄器類の順でその概要を報告する。

A. 瓦 類

瓦類の出土量はコンテナバット30箱程であり、その大半が井戸 SE01内よりの出土である。築地側溝 SD02および包含層中よりも瓦類が出土しているが量的には少ない。瓦の種類には、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦が認められるが、いづれも断片であり全形を窺える固体はない。ここでは、資料数がまとまっている井戸 SE01出土瓦の状況を報告する。

(軒 丸 瓦)

軒丸瓦には2種類の瓦当文様が認められ、これをAとBに分けることとする。

軒丸瓦A 軒丸瓦A (第15図1・2、図版第13・4～7)は、複弁8弁蓮華文を主文とするもので、やや突出した中房に1+8の蓮子を配する。外縁はゆるやかな三角縁となっており、ここに正位置と逆位置とが交互に配される2重の鋸歯文がめぐり、また、主文と外縁との間に一条の圈線を施す。

製作技法上での特色として、瓦当裏面に丸瓦を接合する時に、丸瓦の端面及び凸・凹面の該当部分に「カキベラ」によるきざみを施し接合していることがあげられる。また、瓦当裏面の外周にそって強いナデが施されるのも特徴である。

焼成に関しては、概して良好な固体が多く、淡青灰色から灰白色に発色している。出土個数は6点である。時代的には白鳳時代に比定されるものであり、当寺の創建瓦である。

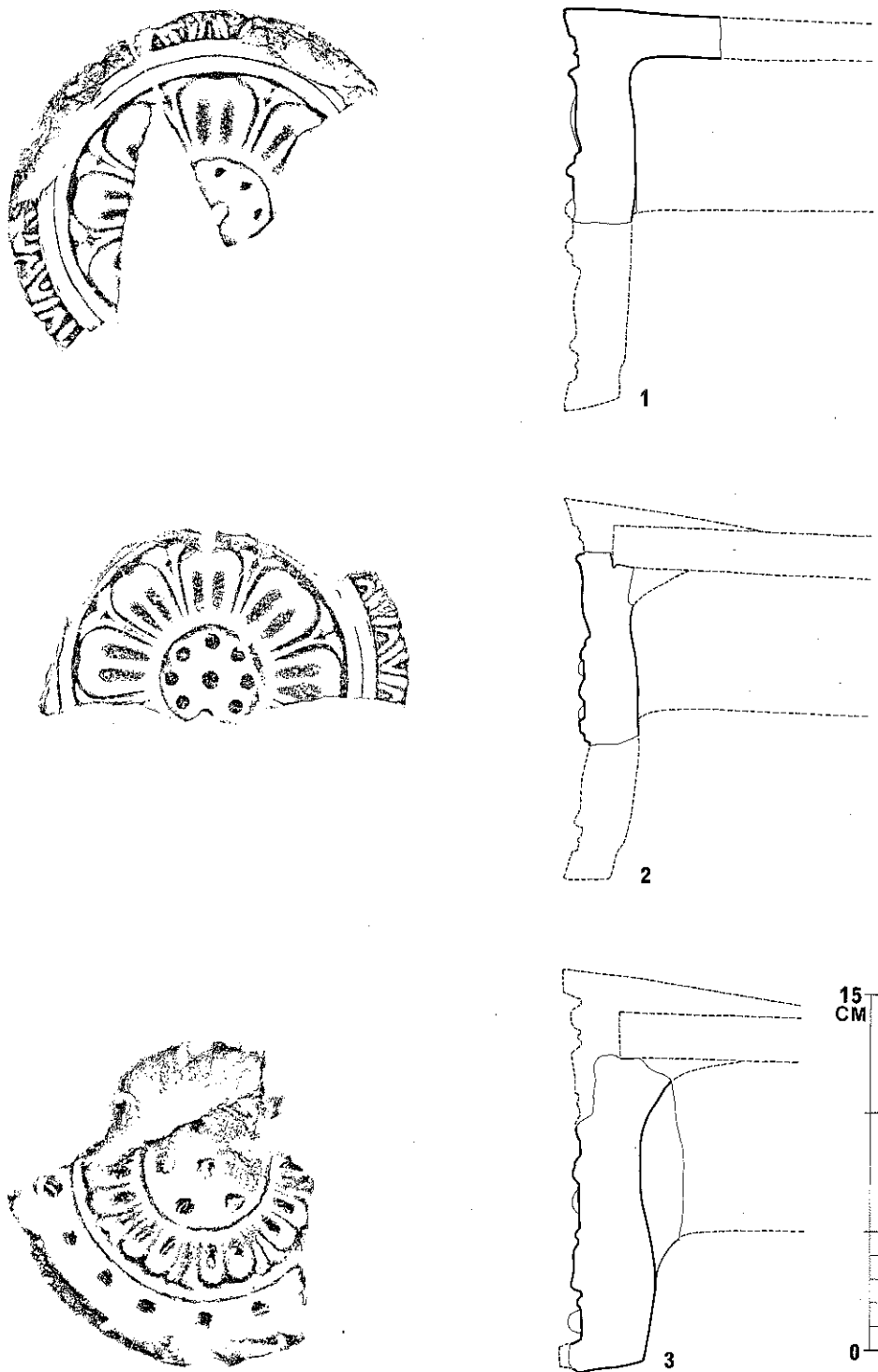
軒丸瓦B 軒丸瓦B (第15図3)は、複弁8弁蓮華文を主文とするもので、圈線によって表現された中房に1+5のやや大ぶりの蓮子を配す。外区内縁には突出気味の珠文が粗くめぐり、外区外縁は直立縁となっている。焼成が不良気味の軟質なもので、1個体が出土している。平城宮6235-Bと同範と思われ、奈良時代の補修瓦である。

(軒 平 瓦)

軒平瓦と断定できるものが1点出土している。瓦当面は剥落が著しく文様の全体を窺えない。おそらく奈良時代に比定できる均整唐草文を主文とするものと思われる。顎の形態は曲線顎であり、凸面は平滑にナデられている。この軒平瓦は、状況的には軒丸瓦Bと組み合わせる可能性が高い。

軒平瓦での問題点として、現在までに軒丸瓦Aと組み合わせるものの出土が皆無であることが

I. 広野麿寺平成2年度発掘調査概要



第15図 軒丸瓦実測図

あげられる。白鳳期の軒平瓦は重弧文が採用されるのが一般的であり、近隣の同時代創建の寺跡においても重弧文が用いられている。当寺跡での軒平瓦は、軒丸瓦Bと組み合わせるものと考えられる奈良時代の唐草文ばかりであり、重弧文は全く見受けられない。速断することはやや危険ではあるが、今は、軒丸瓦Aと組み合わせる軒平瓦は無文の通常の平瓦に類似するものである可能性を指摘しておきたい。

(平瓦)

平瓦は、コンテナバットに15箱分程出土しており、凸面に残るタタキ痕跡の形状よりAとBとに大別できる。

平瓦A 平瓦Aは、凸面に格子状のタタキ痕跡を残すものである。タタキ痕跡には、正格子のものと斜格子のもの2種が認められ、格子の大きさも大小の2種がある。平瓦Aには粘土板接合痕跡が認められ、桶巻作りによるものであることが理解できる。

凸面は、タタキ成形の後、ナデ調整を施すものが多く、部分的に格子状タタキ痕跡が全くナデ消されているものが目につく。このナデ調整を観察すると、ナデの方向は短軸に平行に施されており、規則的であることが理解できる。したがって、回転利用のナデ調整であることがわかる。

凹面は、全面に布目を残し、部分的に糸切りの弧状条痕が認められる。また、両側ぞいに浅い凹線が看取できる個体があり、これが分割時の目安となる分割界線であると考えられる。分割に際しては、凹面より一定の深さの切れ目を入れ、分割していることが側面に残る分割破面よりわかるが、両側面とも分割後にヘラ削りによって調整されているものが多いため、分割破面を確認できる個体は少ない。創建時使用瓦である。

平瓦B 平瓦Bは、凸面に縄タタキ痕跡を残すものである。タタキ痕跡には細いものと粗いものの2種があるが、いずれも長軸に平行する条痕である。一枚作りによるものと判断できる。

凸面は縄タタキの後、何ら調整を加えておらず、凹面も全面に布目が残る。色調は、灰白色ないし黒灰色のものが多い。補修時使用瓦である。

(丸瓦)

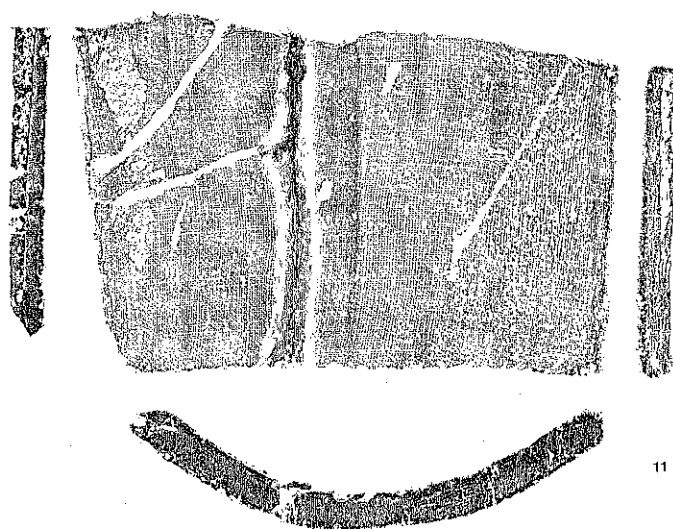
丸瓦は、コンテナバットに10箱分程出土しており、行基式と玉縁式の両者がある。また前者は凸面に残るタタキ痕跡よりA・Bの2種に分類できる。玉縁式の出土量は少ない。

行基式丸瓦A 行基式丸瓦Aは、凸面に格子タタキを有すものであり、タタキ成形後に回転を利用したナデによりタタキ痕跡を消している。創建時使用瓦である。

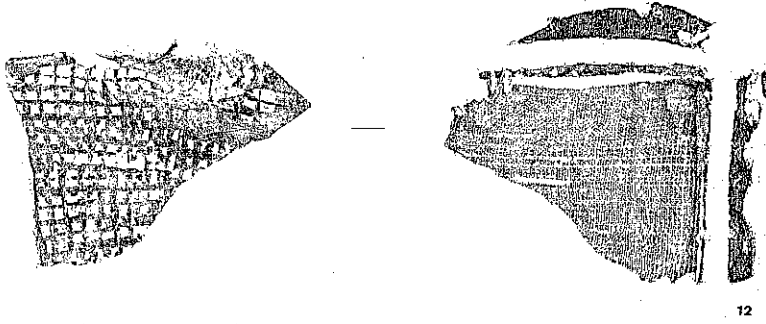
行基式丸瓦B 行基式丸瓦Bは、凸面に縄タタキを有すものである。補修時使用瓦である。

玉縁式丸瓦 玉縁式の丸瓦が少量認められるが、具体的な内容は不明である。

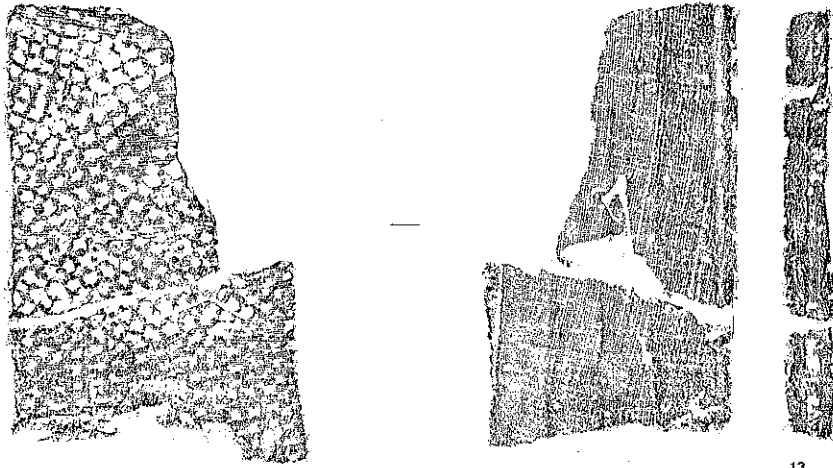
I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



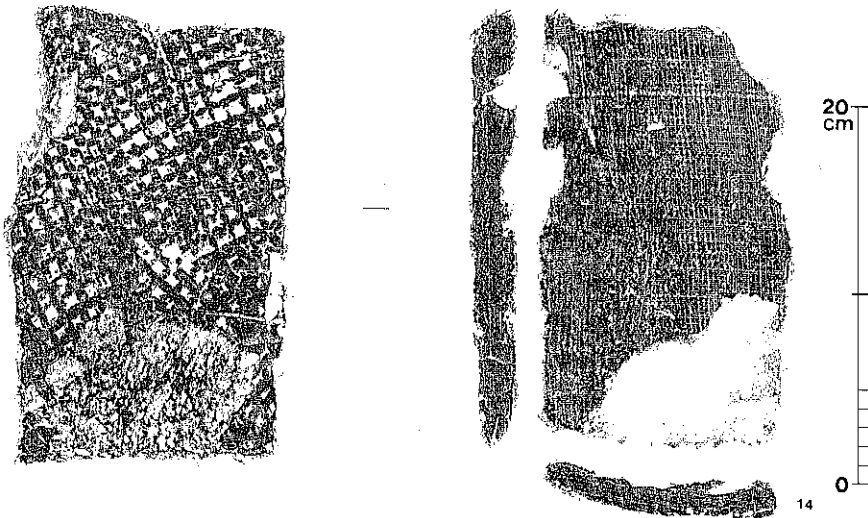
第16図 平瓦A 拓本(1)



12



13



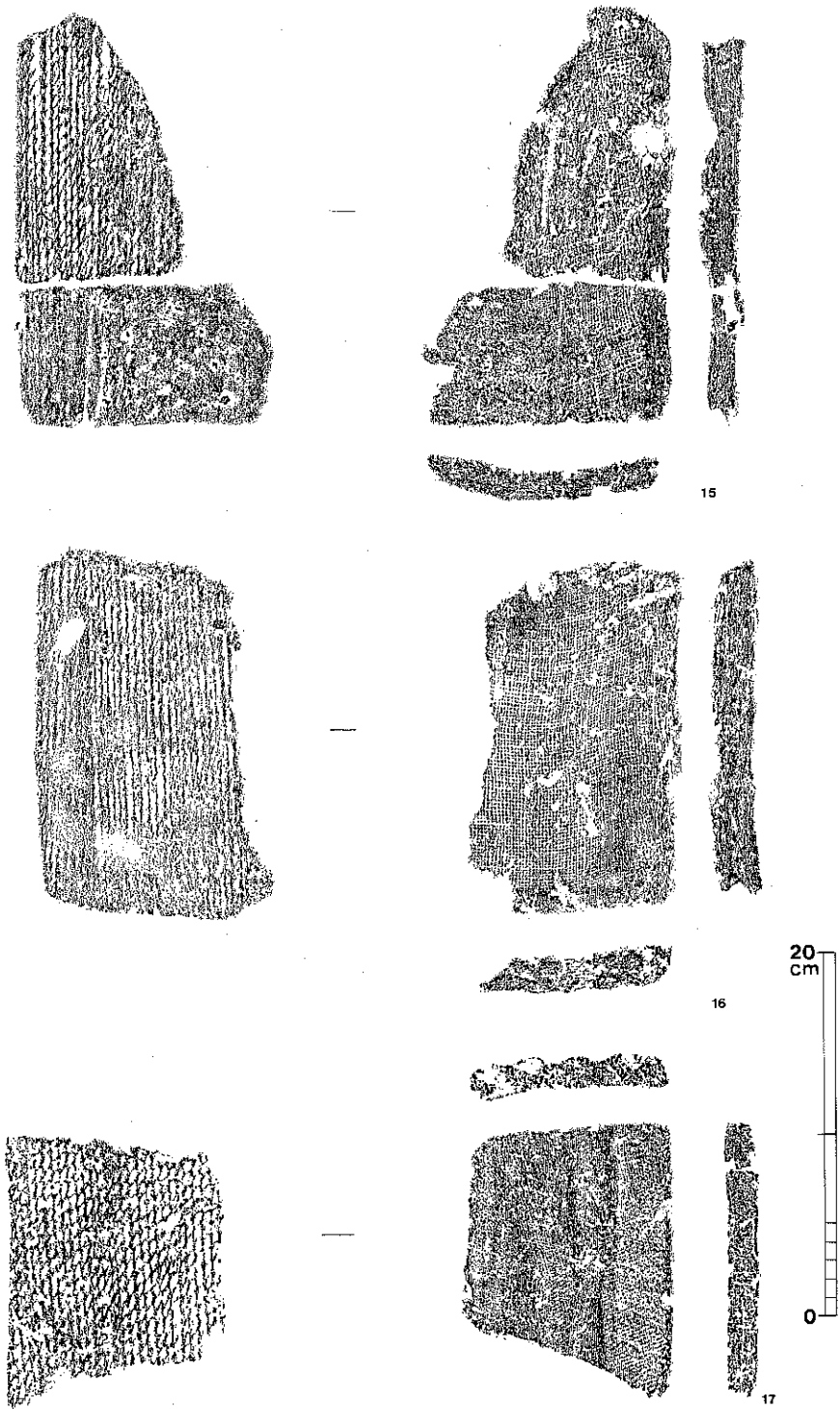
20
cm

0

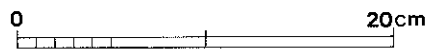
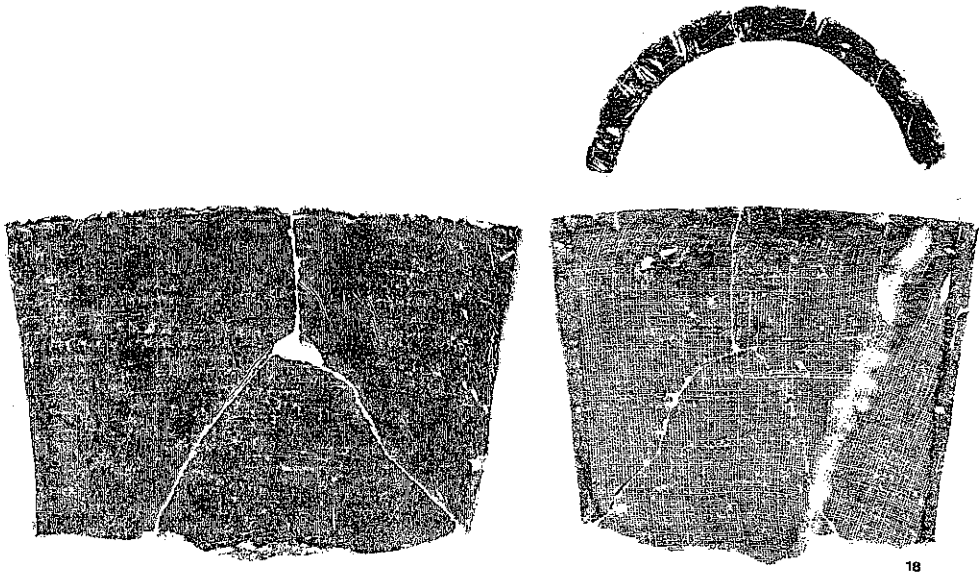
14

第17図 平瓦A拓本(2)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

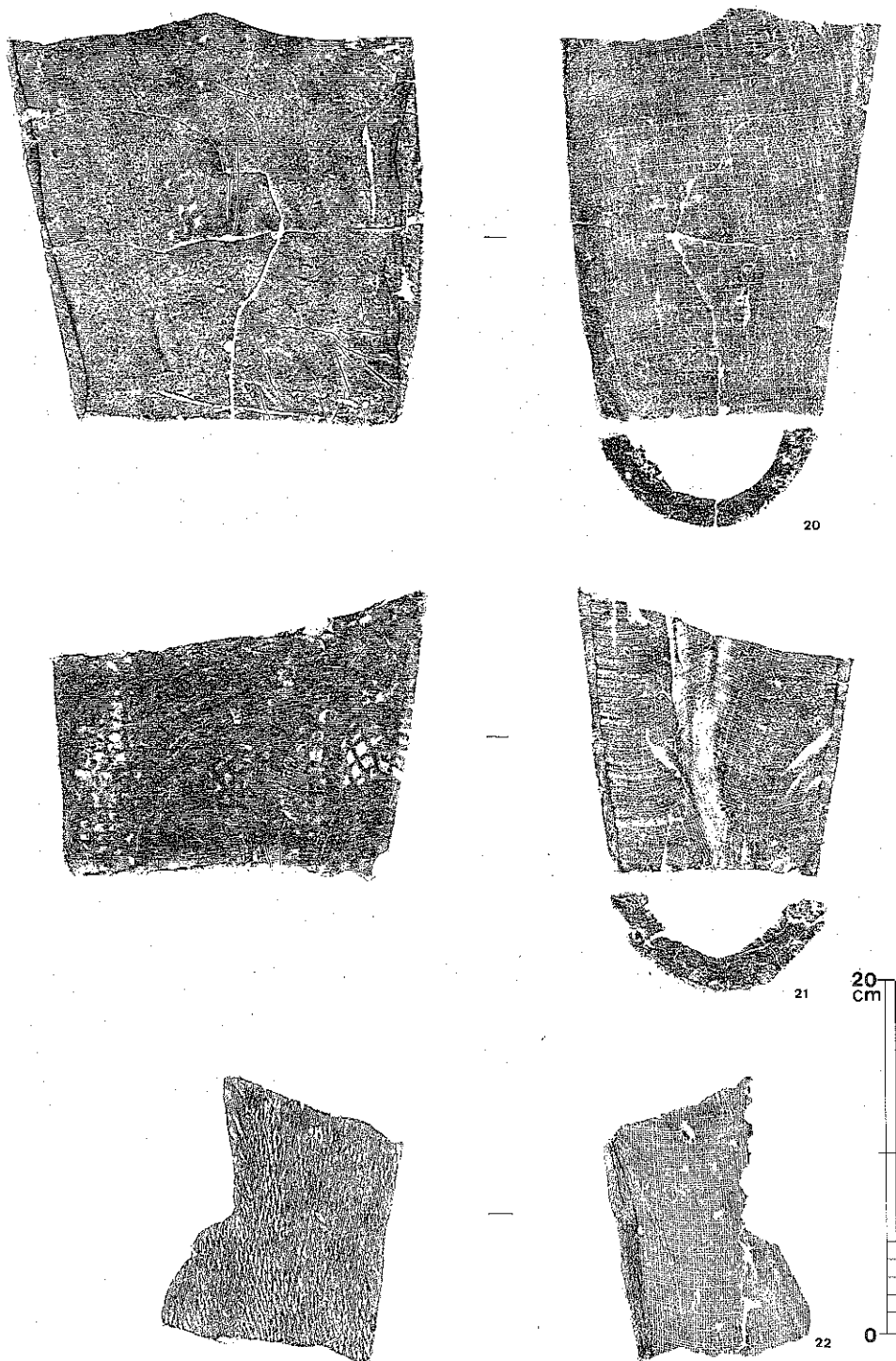


第18図 平瓦B拓本



第19图 行基式丸瓦A拓本

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



第20図 行基式丸瓦A (17、18)・B (19) 拓本

B. SE01の土器

SE01出土の土器には、土師器・須恵器・緑釉陶器がある。これらの土器は寺院が廃絶した段階に使用されていた土器を一括投棄したものと考えられ、様々な器種を含んでおり、寺院において使用されていた土器のバリエーションを知る上で良好な資料と言える。これらの土器は、須恵器の鉢Aなどに古式の様相を留めるものがあるが、土師器の皿Aにc手法のものがある点、暗文がすべて一段放射暗文である点から平城宮Ⅲ～Ⅳ期に併行すると思われる。^{註10}

(土 師 器)

土師器には杯A・杯B・皿A・椀A・高杯A・甕A・甕B・鍋・黒色土器がある。(第21図～第23図)

杯A(第21図1～3)は6個体あり、a手法・b手法が認められ、c手法は1点も認められなかった。暗文を持つものが5点あり、すべて一段放射暗文である。木の葉圧痕を残すものがある。口径は16cm前後のものがほとんどである。焼成は良好で、赤褐色を呈するものが多い。

杯B(第21図4)は身が4個体、蓋が4個体あるが、1点を除いて細片が多い。4は暗文を持っており、一段放射暗文である。焼成は良好で淡橙色を呈する。

皿A(第21図5～10)は13個体ある。a・b・c各手法が確認できた。暗文は8個体で認められ、すべて一段放射暗文である。木の葉圧痕を残すものがある。焼成は良好で、赤褐色を呈するものが多い。

椀Aは3個体ある。手法については、1点のみa手法であることが確認できた。暗文は持たない。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。この土器は、他の土器に比べ胎土が粗く、生産地が異なるかもしれない。

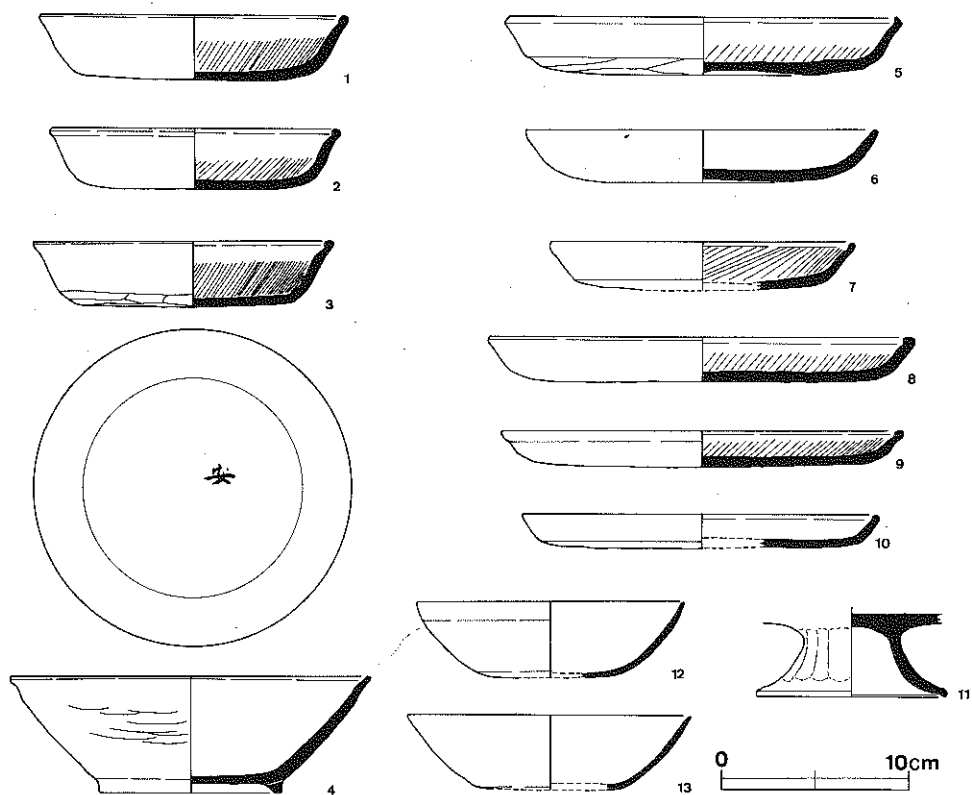
高杯A(第21図11)は2個体ある。焼成はやや不良で、赤褐色を呈する。11は短く径の大きい脚を持ち、15角形に面取りをしている。

甕A(第22図14～16・18・第23図)は14個体以上ある。口径は26cm前後の大型のものと、16cm前後の小型のもの2群がある。大型の一群には、粗いタテハケを外面に施し、やや内湾気味に立ち上がる口縁をもつものと、外反気味に開く口縁を持ち、細かいハケで調整するものがある。前者は褐色系の色調で焼成の良好なものが多く、後者は橙色系で焼成の不良なものが多い。

小型の一群には、球形の体部と外反する口縁を持つものと、肩に段を持つものがある。いずれも灰白色系の色調で、焼成は良好である。

甕B(第22図17)は1個体以上ある。体部外面は粗いハケを施し、内面はナデのようにも見える細かいハケを、工具を器壁から離さずに施す。甕Aの大型の一群で粗いハケを持つもの

I. 広野魔寺平成2年度発掘調査概要



第21図 遺物実測図(1)

のとは色調・胎土共に類似する。

鍋（第22図20）は1個体を確認した。半球形の体部と短く外反する口縁を持つ。色調は橙色で焼成は不良である。

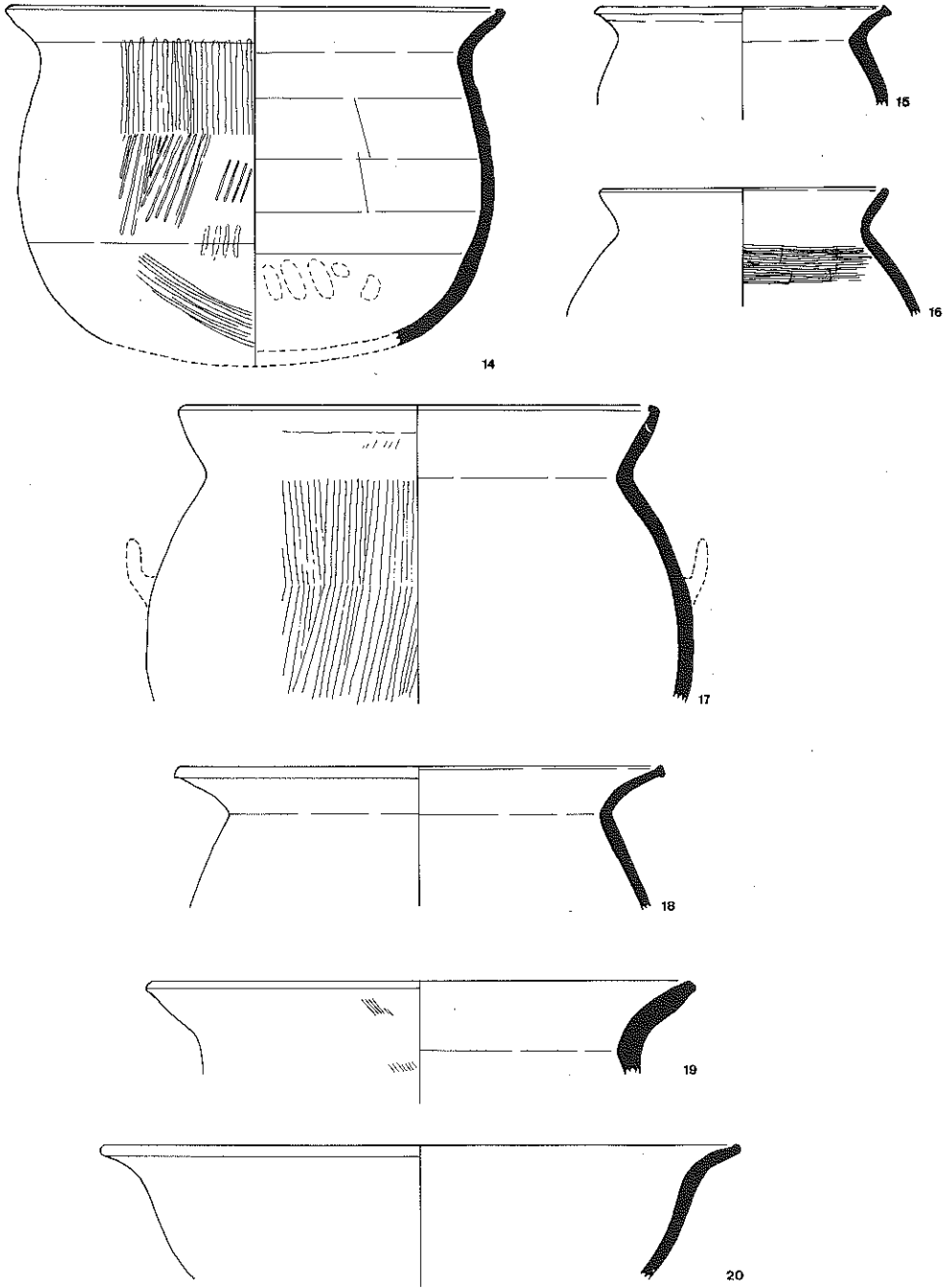
黒色土器（第21図12・13）は3個体ある。いずれも内面黒色土器で、焼成不良のため調整は不明である。

なお墨書土器が杯Aに1点、皿Aに2点あるが、判読できるものは1点のみである。杯Aの例で底面に「安」の文字が書かれている。

（須恵器）

須恵器には杯A・杯B・皿A・鉢A・鉢E・壺K・壺L・壺M・平瓶・水瓶・甕A・甕B・甕C・円面硯がある。（第24図～第27図）

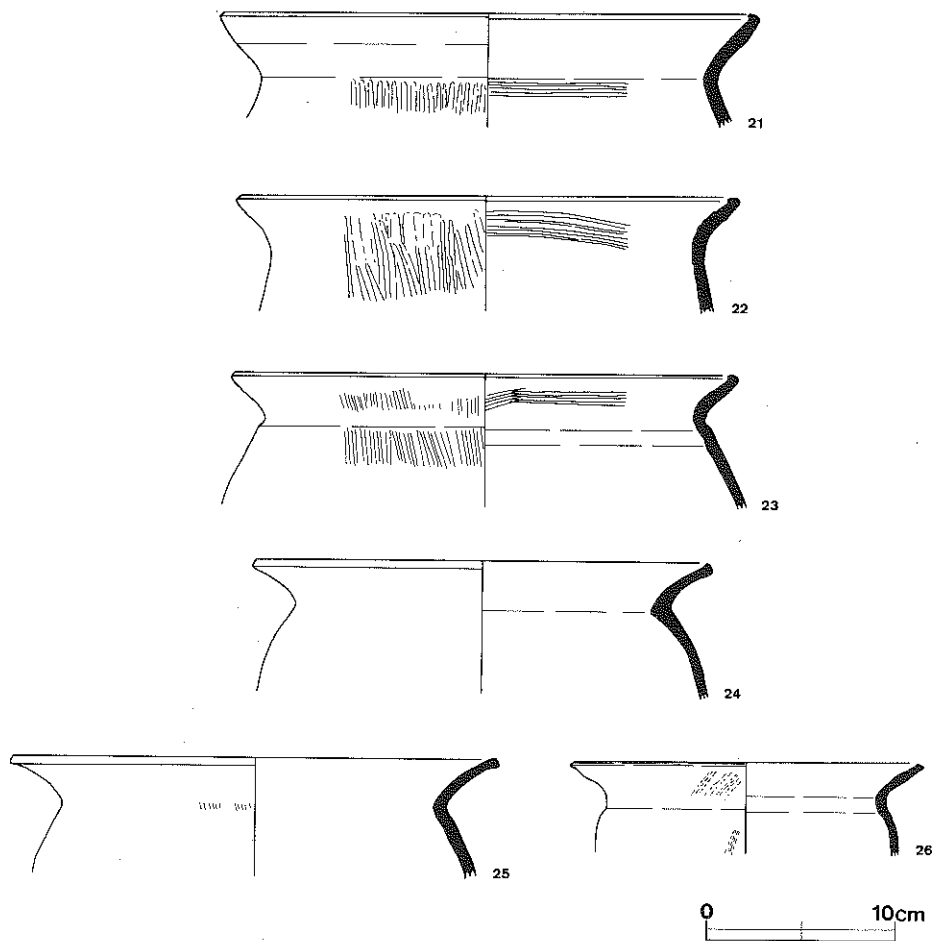
杯A（第24図27～33）は12個体ある。斜め外方に広がる口縁を持つ。口径12cm前後のもの、13.5cm前後のもの、15cm前後のもの3種類に分けることができる。底部はヘラ切りによって切りはなした後不調整の例が多いが、大型のものにナデを加えている例が認められる。杯B（第24図34～38）は身が10個体、蓋が5個体ある。身では口径16.5cm前後のもの11.5



0 10cm

第22図 遺物実測図(2)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



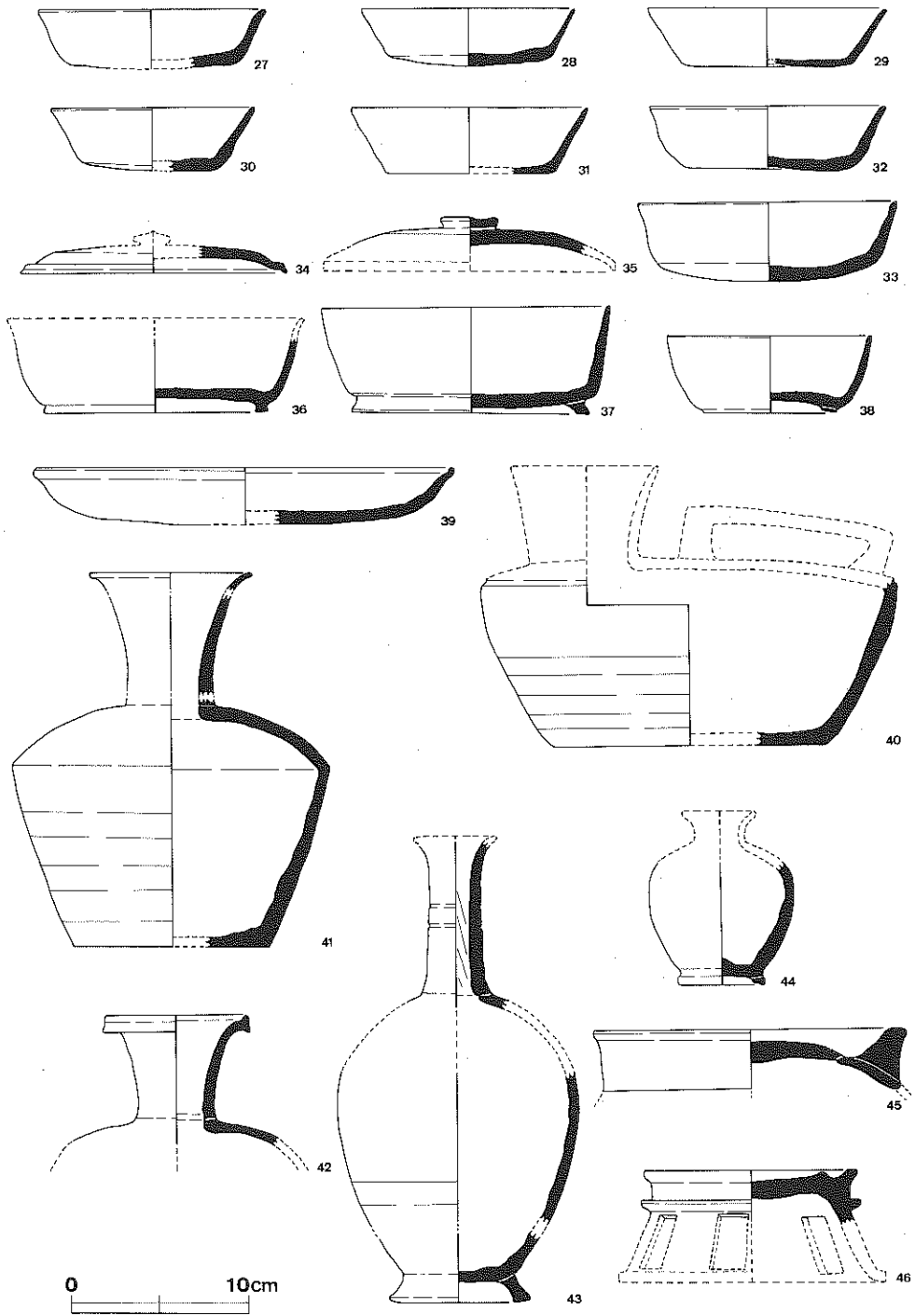
第23図 遺物実測図(3)

cm前後のものがある。高台は外方に張り出すものと、ほぼまっすぐ下方にのびるものがある。蓋では1例のみ内面が摩滅したものがあり、転用硯として使用されている。

Ⅲ A (第24図39) は1個体ある。内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は内側に丸く肥厚する。土師器の皿に類似した形態を持つ。

鉢 A (第25図47~49) は3個体ある。大型と小型の2種がある。小型のものは球形の体部を持ち、口縁近くでやや強く内湾する。口径は17cmである。大型のものはやや平坦な底部から斜め外方に立ち上がり、体部中位もしくは口縁近くで内湾する。口径は48が29cm、49が25cmである。

鉢 E (第25図50) は1個体ある。平坦な底部を持ち、やや開きぎみに直線的に立ち上がる体部を持つ。口縁はわずかに外反する。体部下位はロクロケズリを施し、上位はロクロナデを施す。焼成は不良である。



第24図 遺物実測図(4)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

壺K（第24図41）は1個体ある。平底で肩に稜を持つ体部と、細長い口頸部からなる。高台は持たない、口縁部から肩部にかけてはロクロナデを施し、体部下半はロクロケズリを施す。

壺L（第24図42）は1個体あり、口頸部のみが出土している。口縁端部は屈曲し、幅を持った凹面を持つ。口径7.8cm。

壺M（第24図44）は1個体ある。体部のみが出土している。卵形の体部と外方に張り出す高台を持つ。

平瓶（第24図40）は1個体あり、体部のみが出土した。体部上半部はロクロナデを施し、体部下半部はロクロケズリを施す。

水瓶（第24図43）は1個体が出土している。卵形の体部を持ち、外方に強く張り出す高台を持つ。ほぼ直線的にのびる口頸部を持ち、口縁端部はわずかに外反して開く。口頸部には2条の沈線を施し、内面にはシボリメが残る。口頸部から体部上半にかけてロクロナデを施し、体部下半はロクロケズリを施す。

甕A（第26図51・52）は4個体あり、この内2点を図示し得た。51は卵形の体部に外反する口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し面を持つ。口径22.8cm、器高43.5cm。52は算盤玉状の体部を持ち、わずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部は肥厚し面を持つ。肩部から頸部にかけてはタタキのあとロクロナデを施す。口径15cm。

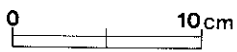
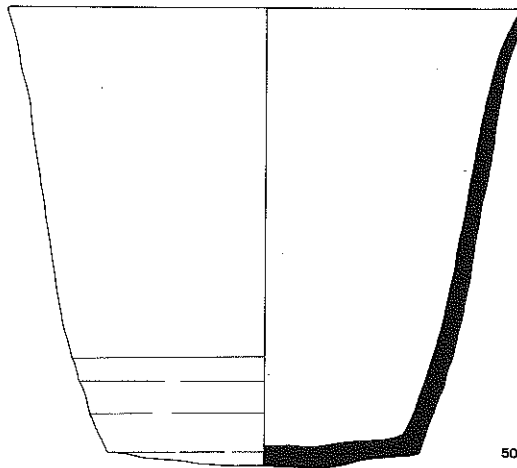
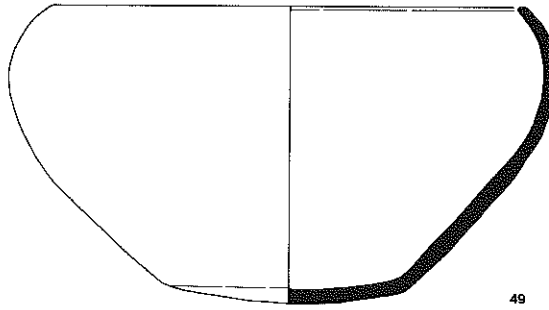
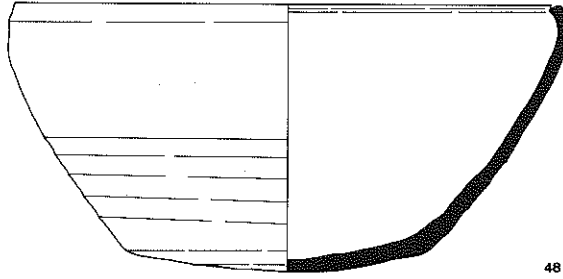
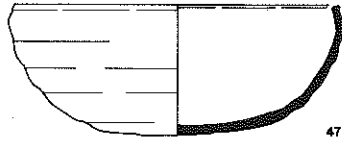
甕B（第27図54）は2個体ある。54は卵形の体部を持ち、内湾ぎみの口縁を持つ。肩部に耳を持つ、口径20.5cm。

甕C（第27図53）は1個体ある。肩の張った体部にわずかに外反する短い口頸部を持つ。半環状の耳を持つ。

円面硯（第24図45・46）は2点ある。45は硯面が山形をなし、陸と海の区別が不明瞭なものである。脚部は欠損している。硯面と外提とを別に作っており、剥離した状態で出土している。硯面はよく使用されており、摩滅が著しい。46は陸と海との区別が明瞭で、硯面と脚部が連続的に作られたものである。脚部は欠損しているが孔の痕跡を確認でき、8孔が穿たれていることがわかった。硯面には明瞭に使用痕が残る。

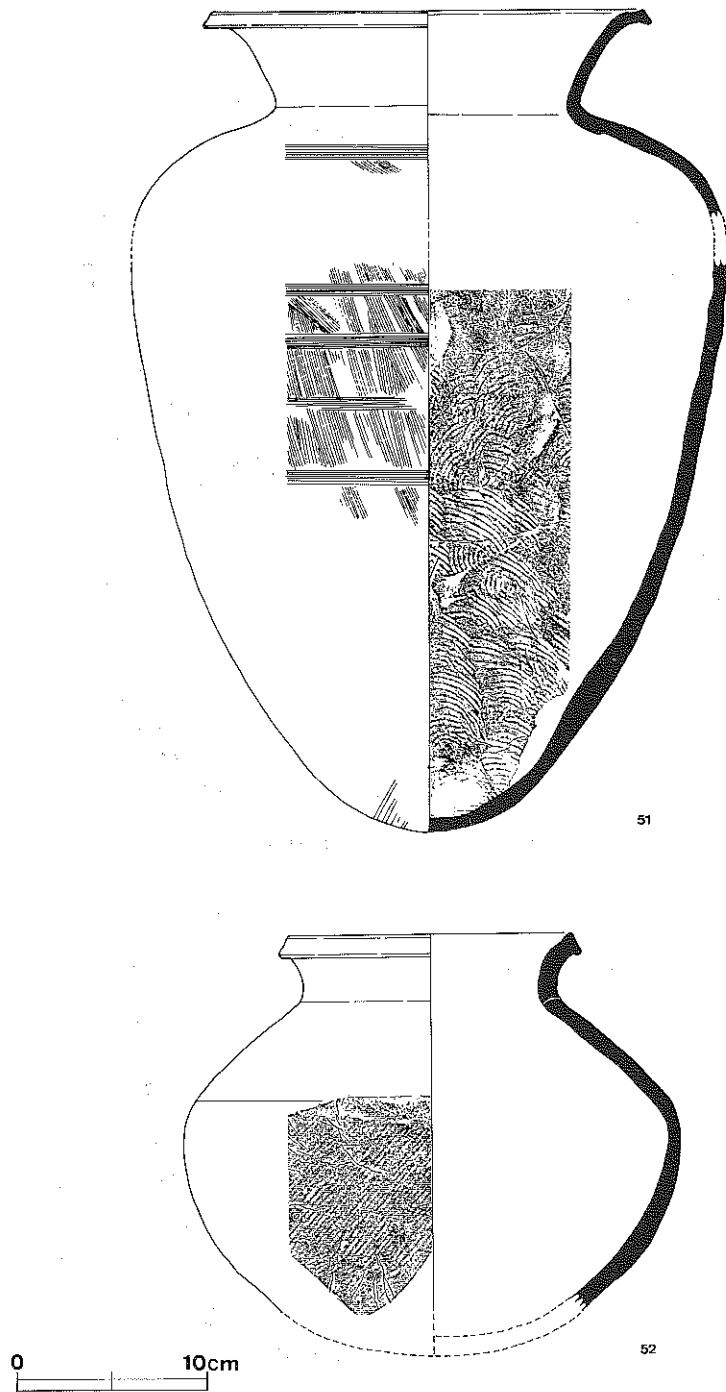
（緑釉陶器）

緑釉陶器は1点あり、底部と高台の一部が出土している。鉢もしくは壺の破片と考えられる、較質で灰白色を呈する土器である。高台は張り付け高台で、端部は内傾する。外底面にも釉がかかる。

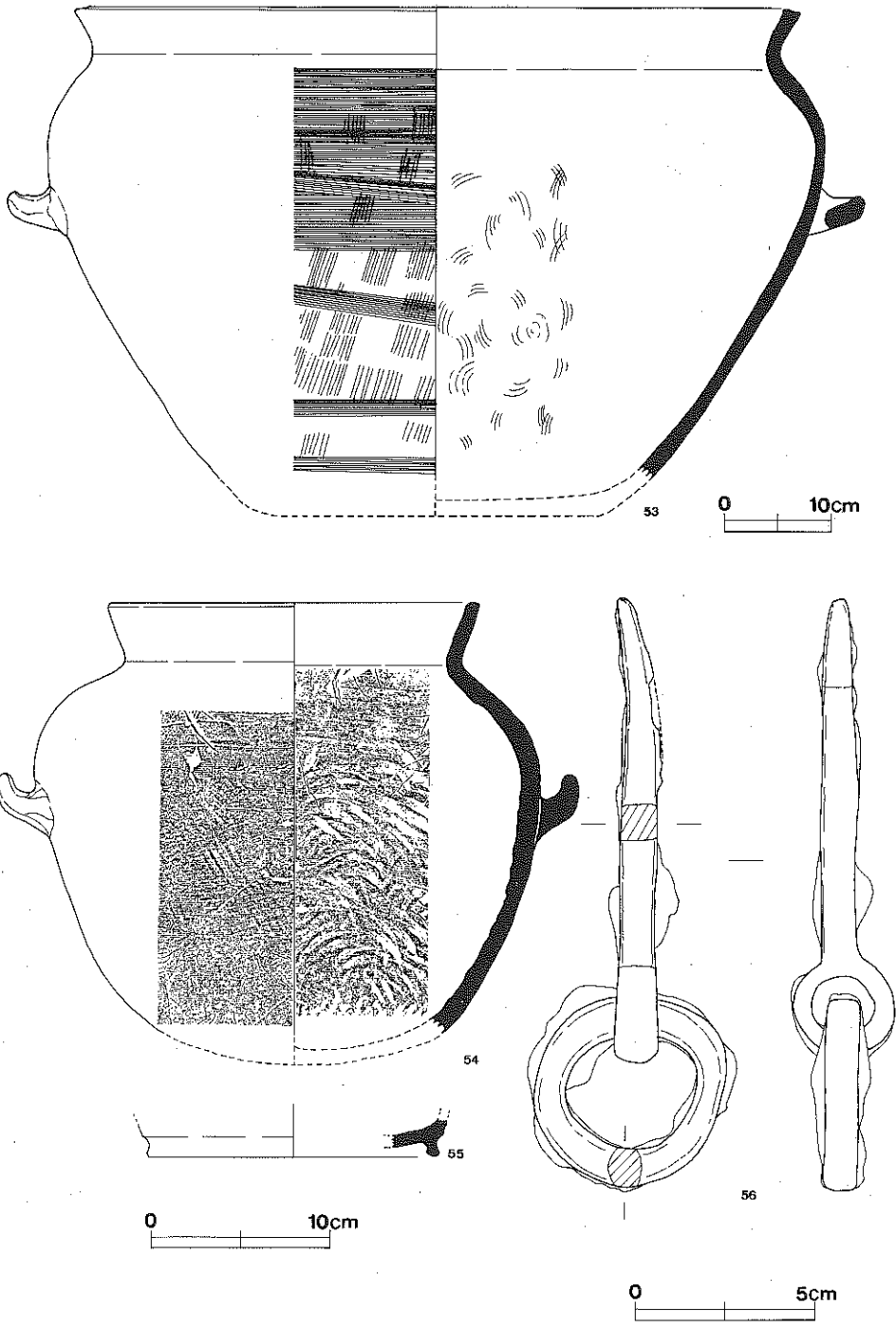


第25図 遺物実測図(5)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

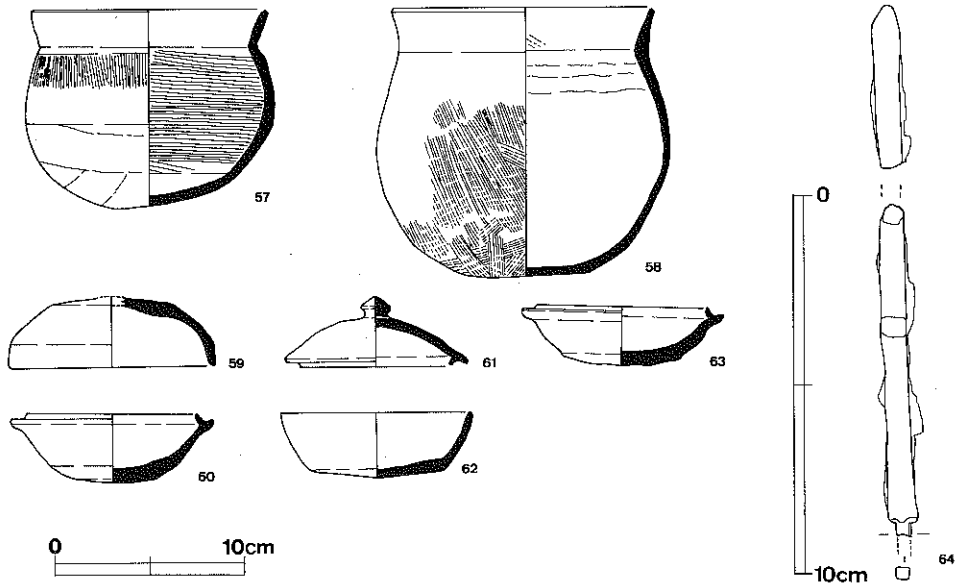


第26図 遺物実測図(6)



第27図 遺物実測図(7)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



第28図 遺物実測図(8)

C. その他の遺構出土の土器

SE01以外では、堅穴式住居・ピットなどから遺物が出土している。この遺物の多くが寺院創建以前の土器である。SB10の柱穴内からも出土しているが、これらの土器は流れ込みと考えられる。

(堅穴式住居出土の土器)

堅穴式住居ではSH06、08、09から土器が出土している。SH06からは土師器の甕が2個体分及び須恵器が出土しているが、図示し得るのは2点である。(第28図57・59) 57は土師器の甕で、炉の周辺から出土している。球形の体部を持ち、わずかに開く口縁をもつ。体部上半は縦方向のハケ、体部下半はヘラケズリを施す。内面は横方向のハケで、底部内面のみヘラケズリをする。口径12.3cm、器高10.5cm。59は須恵器の杯蓋である。口径10.7cm。7世紀前半のものである。

SH08では土師器・須恵器が出土している。(第28図58・61) 58はカマド内に伏せた状態で置かれていた土師器の甕である。この甕の上には、別の土師器の甕の破片2点が乗せられていた。球形の体部にわずかな平底を持つ。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は口縁部のみヨコナデで体部内面は不調整である。頸部付近には粘土紐の巻き上げ痕を残す。口径10.6cm、器高14.1cm。61はカマドの西側の床面に密着した状態で出土した須恵器の杯蓋である。内面にはかえりを持ち、宝珠つまみを有す。これらの遺物はSH06と同様に7世紀前半に比定できる。

土師器	個体数		
	上層	中層	下層
杯 A	2	3	1
杯 B身	1	1	2
杯 B蓋	3	1	0
皿 A	4	6	3
椀 A	3	0	0
高杯	1	1	0
甕	12	3	0
鍋	1	0	0
黒色土器	3	0	0
計	30	15	6

須恵器	個体数		
	上層	中層	下層
杯 A	8	2	2
杯 B身	6	2	2
杯 B蓋	4	1	0
皿 A	0	1	1
鉢 A	0	0	3
鉢 E	0	0	1
壺 K	1	0	0
壺 L	1	1	0
壺 M	0	1	0
平瓶	1	0	0
水瓶	1	0	0
甕 A	3	0	1
甕 B	0	0	2
甕 C	0	1	0
硯	0	1	1
計	25	10	13

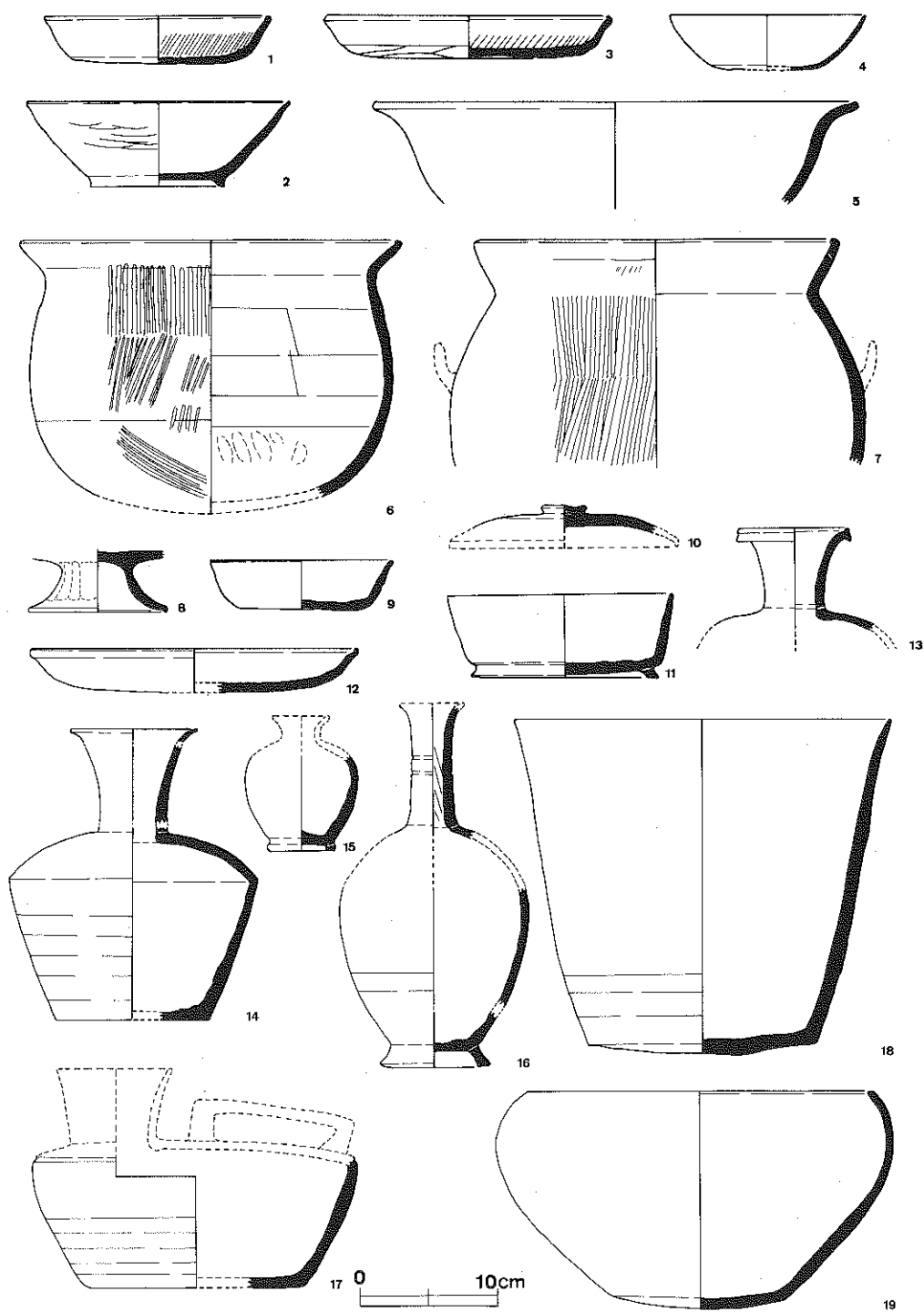
	手法				暗文	
	a	b	c	不明	有	無
杯 A	4	2	0	0	5	1
皿 A	4	3	4	2	8	5
計	8	5	4	2	13	6

表1 SE01出土土器の構成と技法

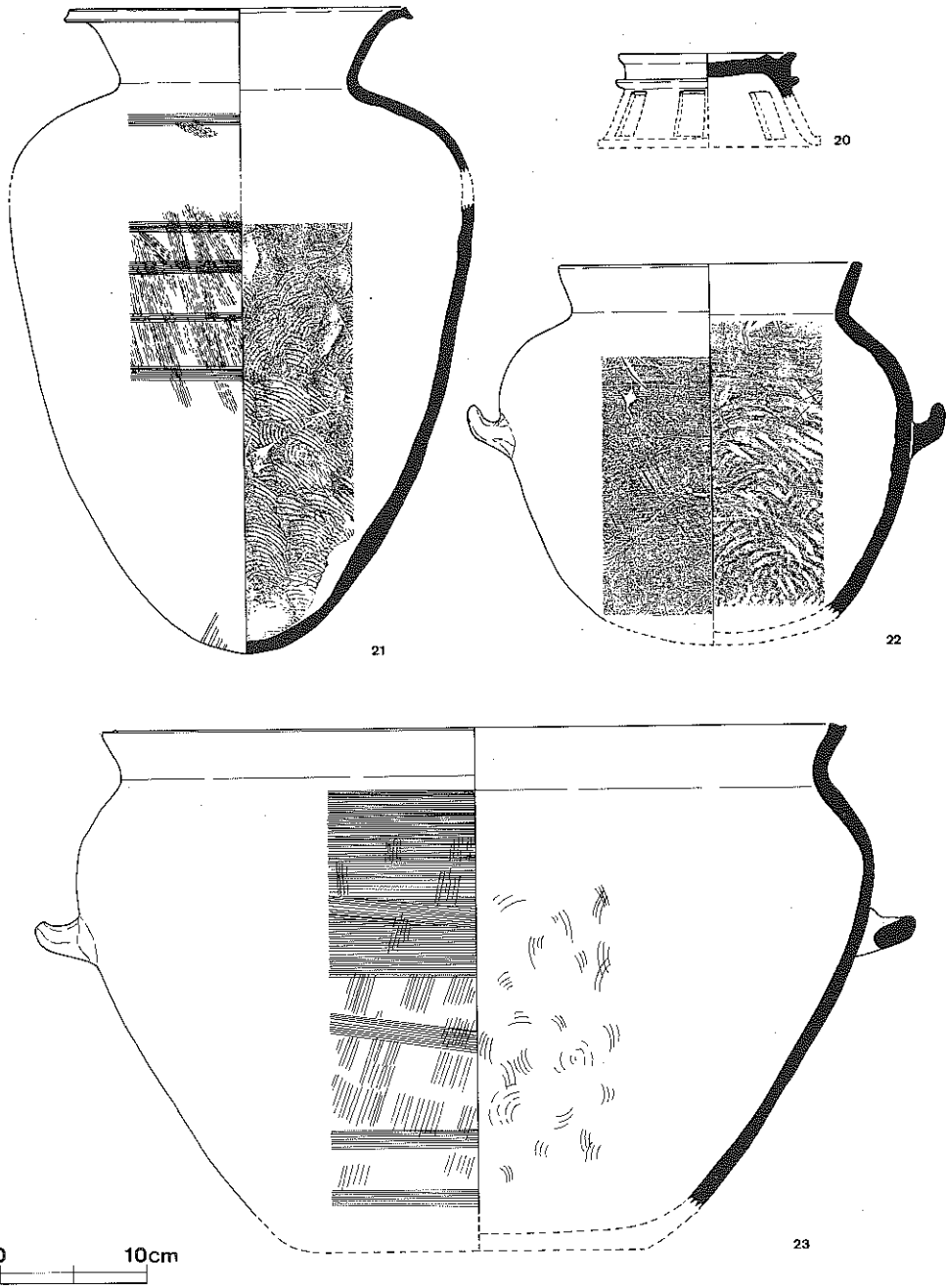
土師器	番号	須恵器	番号	須恵器	番号
杯 A	1	杯 B身	11	壺 M	15
杯 B	2	杯 B蓋	10	平瓶	17
皿 A	3	杯 E	9	水瓶	16
椀 B	4	皿 A	12	甕 A	21
高杯 A	8	鉢 A	19	甕 B	22
甕 A	6	鉢 E	18	甕 C	23
甕 B	7	壺 K	14	円面硯	20
鍋	5	壺 L	13		

表2 SE01出土土器器種一覧表

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要



第29図 SE01出土土器器種一覽図(1)



第30图 SE01出土土器種一覽図(2)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

SH09では須恵器の杯身が出土している。(第28図60) 口縁端部にかえりを持つ。口径9cm、器高3.6cm、SH08と型式的な時期差は認められない。

(ピット・包含層出土の遺物)

ピットから出土した遺物で今回図示した遺物は、すべてSB10の柱穴から出土した遺物である。62は須恵器の杯身である。口径10.2cm、器高3.5cm。63も須恵器の杯身である。口縁端部にかえりを有する。口径9cm、器高2.9cm、いずれも7世紀中葉の遺物と考えられるが、62が若干新しい様相を呈している。63は住居社の年代と一致する。これらの遺物は柱穴を掘削した際に流れこんだものであろう。

包含層から出土した遺物の中には、須恵器の羽釜がある。(図版22) トレンチ東部のSD14付近から出土している。破片数が少ないため全容を知り得ないが、口縁部の一部と底部の一部がある。内傾する口縁と幅約2cmの鏝を持つ。外面には平行叩き、内面には同心円状の当て具痕が残る。焼成は不良で、灰白色を呈する。

D. 鉄器類

鉄器類は2点出土している。(第27図56・第28図64) 56はSE01から出土した金具である。全長13cmの断面方形の釘の先端に、直径5.2cmの断面楕円形の円環を付けたものである。寺院の建物に使用されていたものと思われる。

64はSB10の柱穴内から出土している。関の部分が認められ、長頸鏝と思われる。茎と頸部が折損している。

7. ま と め

今回の調査で得た知見については、その概要を前述した。ここでは、本調査の成果を整理し、まとめとしたい。

(広野廃寺の創建年代)

広野廃寺の創建瓦は、現在のところ川原寺垂式の軒丸瓦Aと見てよい。したがって現時点において、同廃寺の創建年代を探る手懸りは、この瓦当文様をいつに比定するかが最も効果的なものとなっている。

軒丸瓦Aの文様標式である大和川原寺の創建年代については、なお検討の余地を有するが、概ね天智天皇元年(662)以降、天武天皇2年(674)までの間とするのが一般的である。現在、南山城地方における古代寺院で標式例に近い文様を使用する寺跡は、高麗寺跡(山城町)・平川廃寺(城陽市)・大鳳寺跡(宇治市)の3寺跡であり、特に高麗寺跡からは大和川原寺と同範品^{註12}が出土している。これらの寺跡の創建年代については、文様に退化要素がほとんど認められない点より、大和川原寺完成後ほどなく建立された寺と考えて良い。南山城地方に展開する川原寺式軒丸瓦の中で、第Ⅰ期に比定できるものである。

広野廃寺軒丸瓦Aについては、これらに比べ文様の退化が顕著に認められる。同様に一般的に川原寺垂式とされる瓦を出土する寺跡として、広野廃寺以外に平川廃寺(城陽市)・久世廃寺(城陽市)・正道廃寺(城陽市)・山滝寺跡(宇治田原町)・蟹満寺(山城町)・高麗寺跡(山城町)などが挙げられる。南山城地方川原寺式の第Ⅱ期のものである。第Ⅱ期の瓦当文様については、高麗寺跡での標式例より派生した高麗寺式と呼ばれるものと、平川廃寺の標式例より派生した平川廃寺式と呼ばれるものの2者が考えられ、前者は高麗寺跡を中心に蟹満寺や山滝寺跡のように主に相楽・綴喜郡の寺院に、後者は平川廃寺を中心に久世郡や広野廃寺のように久世郡の寺院で使用されている。高麗寺式にしる平川廃寺式にしる、その成立時期は派生・展開の状況より考えてほぼ同時期と考えるべく、7世紀後半でも末葉に近い時期に比定するのが現状では最も可能性が高いように思われる。




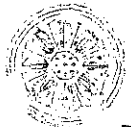






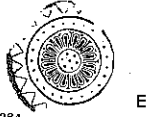









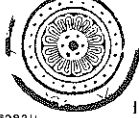
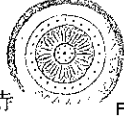

広野廃寺では現段階において、軒丸瓦Aより古く比定できる瓦当文様の出土はなく、これをもって当廃寺の創建瓦とするが可能であるため、南山城地方川原寺式第Ⅱ期にその建立年代を考えるのが最も蓋然性が高い。

(奈良時代の改修)

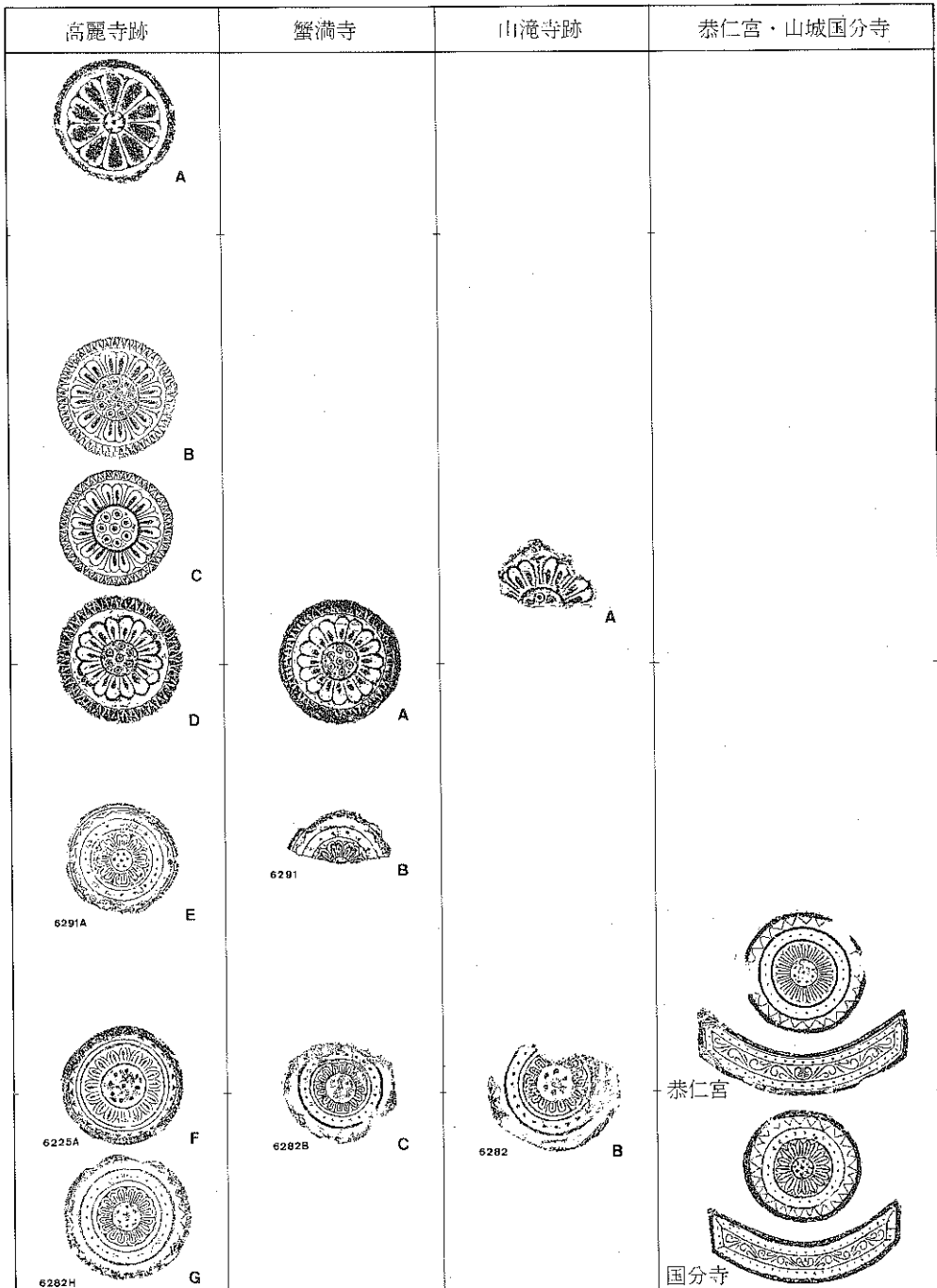
寺院の改修の状況を窺う資料も創建の場合と同じように瓦からの分析が効果的である。

広野廃寺における改修事実を示す瓦類として、軒丸瓦B・唐草文軒平瓦・平瓦B・行基式

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

	広野廃寺	平川廃寺	久世廃寺	正道廃寺
飛鳥			 A	 A
645		 A		 B
白鳳		 B		 C
710	 A	 C	 B	 D
		 E		
奈良		6284	 C	 E
		6291A		
		 F		
		 G	 D	
745		6314A		
		 H	 E	 F
	 B	6235B	6225	6282B
		 I	 F	 G
		6282H	国分寺	6235

第31図 木津川右岸主要寺院軒丸瓦編年図(1)



第32図 木津川右岸主要寺院軒丸瓦編年図(2)

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

丸瓦B・玉縁式丸瓦がある。軒丸瓦B及び唐草文軒平瓦は平城宮使用瓦と同範のものであり、平城宮Ⅲ期（天平17年から天平勝宝年間）に比定^{註13}できる。平瓦B・行基式丸瓦B・玉縁式丸瓦も同期のものであろう。井戸SE01での出土状況を考えると、これらの改修使用瓦の出土割合は、全出土量の40%程と高率であり、この時期に大規模な改修が実施されたことを窺わせる。

南山城寺院では、奈良時代の改修時に平城宮式の瓦が使用される事が多い。しかし、これらの瓦当文様を詳細に見てゆくと、平城宮Ⅲ期の軒丸瓦では、平城宮6282系・6225系・6133系が改修時の主要な瓦当文様となっているのに対し、広野廃寺では東大寺式の6235系1種のみにおいて構成されている特色を現状で指摘できる。平城宮6235系は、南山城諸寺院においては余り発見されていないものであり、奈良時代の改修実態を考える上では、この点は注意すべきであろう。

（廃絶の時期）

広野廃寺の廃絶を窺う資料は、前述のごとく井戸SE01出土土器群である。時期的には平城宮Ⅲ～Ⅳ期に比定できるものであり、年代的には8世紀第3四半期を中心とするものである。井戸SE01は、寺域外施設であるが、この地区においても寺院造営時に寺域と同様な整地が実施されていること、大型掘方と井戸館をもつ整備された井戸であり通有な井戸とは考え難いこと、井戸内より仏器・硯を始め瓦類が多量に出土していること等より、寺院付属施設であることはまちがいが無い。したがって、現状では井戸の廃絶がすなわち寺の廃絶であると考えるのが最も可能性が高い。しかし、これには若干の問題がある。奈良時代の改修使用瓦の年代と井戸内出土土器の年代が余りにも近いことである。今は、井戸の廃絶時期、すなわち8世紀第3四半期に当時跡の廃絶年代を想定し、寺院存続時における寺域外施設整理等の状況により寺院本体部の廃絶が寺域外施設とは同一でない可能性も考えておきたい。

（久世郡諸寺院と広野廃寺）

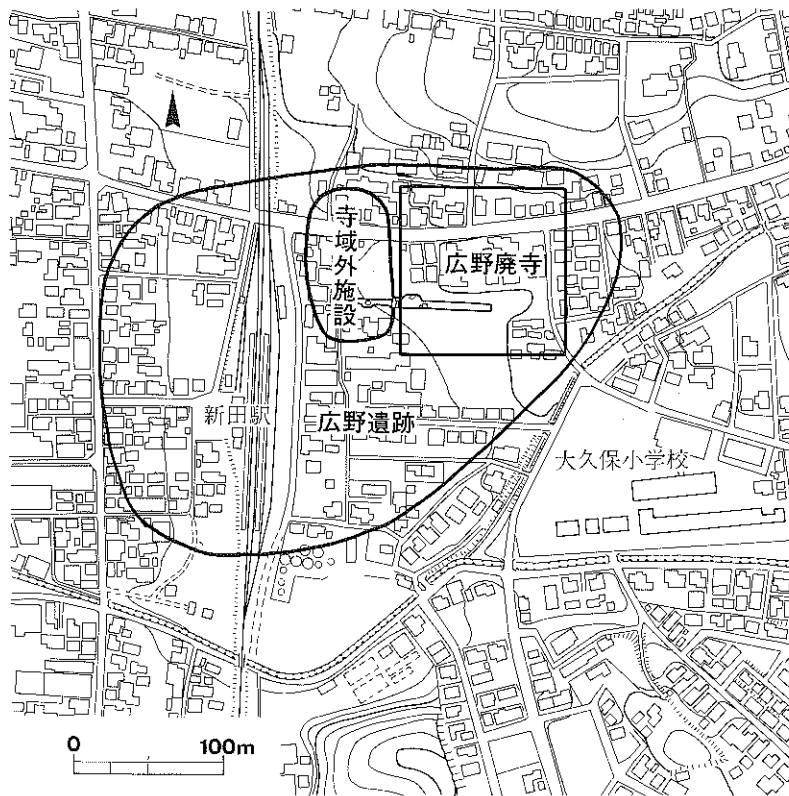
広野廃寺創建瓦が他の久世郡諸寺院のものと密接な関係を有すことは前述した。特に平川廃寺では、広野廃寺軒丸瓦Aと同範品^{註14}が出土しており、他にも異範ではあるが同文のものが見受けられる。後者は、久世廃寺の中心的な瓦であるとともに、正道廃寺でも同様な瓦が出土している。各寺院の創建時期については、正道廃寺・久世廃寺が飛鳥時代に遡る可能性が高く、平川廃寺は川原寺式標式例の時期と考えて良い。現時点では、広野廃寺の創建は久世郡諸寺院の中では最も遅いものと判断できる。しかし、このように平川廃寺式の瓦当文様が久世郡諸寺院の中で通有に認められる事実は、この時期、以前より存在した平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺において大規模な伽藍整備が実施された事を示すと考えて良く、この現象と期を一にして広野廃寺が建立された可能性を物語っていると思われるのである。

(寺域の復元)

今回の調査では、前述したように西側築地を検出したが、中心建物は検出しなかった。この調査成果から類推して寺域を復元したのが第33図である。寺域の東限はまだ不明と言わざるをえないが、一町四方と推定して復元した。

伽藍配置は、瓦における久世郡諸寺院との密接な関連を考えると、久世郡諸寺院に一般的な法隆寺式、もしくは法起寺式である可能性が高い。調査地周辺の地形は、調査地の北方約100mに丘陵裾があり、南方約80mには低湿地がひろがる。この状況から調査地周辺から北方が建物の存在する可能性の高い地点と言える。今回の調査地の中で塔や金堂の基壇を検出しなかった事を考えると、丘陵裾に講堂を想定し、調査地のすぐ北側に塔と金堂を想定するのが最も妥当と考えられる。これにより北限と南限のラインを設定した。

築地の西の寺域外にあたる地点では、井戸とピットを検出している。この井戸から出土している遺物の内容を見ると、僧坊などで使用されていた土器群であることが理解できる。これらの遺物が主に西側から投げ込まれていることから、井戸のさらに西に僧坊などの施設の存在が推測できる。



第33図 広野廃寺・広野遺跡範囲想定図

I. 広野廃寺平成2年度発掘調査概要

南山城地域においては、平川廃寺で寺域外に掘立柱建物が検出されている^{註15}のみであるが、今後今回の例と同様に寺域外にも関連施設が確認される可能性が考えられる。

(下層集落と広野廃寺)

今回の調査で、広野廃寺の遺構とは別に、主に7世紀第2四半世紀に属する集落の一端を知ることができた。この遺跡はこれまで知られておらず、今回新たに広野遺跡として認定した。遺跡の範囲は、地形から勘案して東から西にむかう扇形の緩斜面上にひろがっているものと思われる。遺跡の時期は、前述した7世紀第2四半世紀にあたる遺物が最も多いようであるが、7世紀初頭の遺物やピット内から出土した須恵器のような7世紀第3四半世紀にあたる遺物もあり、広野廃寺が創建される直前まで集落が営まれていたようである。

下層集落の存在は南山城の各寺院においても認められる。宇治市内の大鳳寺^{註16}では、遺構の検出はみなかったが、広野遺跡とはほぼ同時期の遺物が出土している。岡本廃寺^{註17}では、講堂の北雨落とし溝の上層から、やはり7世紀前半の遺物が出土しており、整地に伴う流入遺物と考えられている。久世廃寺^{註18}では、下層から古墳時代後期の集落を検出している。高麗寺^{註19}では寺院創建以前の掘立柱建物を検出している。これらの遺構・遺物は各寺院の創建時期の直前もしくはそれに近い時期のものが多い。

この事実は、古代寺院の選地が未利用の土地に行なわれるのではなく、氏族の拠点の集落内に行なわれることを示すものではないだろうか。広野廃寺の場合広野遺跡の中の最も高所に造られている。そしてそれに伴い集落の移動も行なわれた可能性も考えられる。広野廃寺の寺域の北にある一里山遺跡は、発掘調査が行なわれていないため詳細は不明であるが、奈良時代の土器が散布し、広野廃寺の時期と一致する。この集落が広野遺跡から移された集落と考えることもできる。大鳳寺でも寺院の北東の丘陵上に、奈良時代から始まる東中遺跡^{註20}があり、広野の状況と一致している。

(結 語)

今回の調査では、寺域の西限の確定や寺域外施設の確認、創建以前の集落の確認など大きな成果を上げることができた。また井戸から出土した土器群は、寺院における使用土器のセット関係を知る上でも良好な資料と言える。

しかし金堂や塔などの中心部分については、かなり想定範囲をしぼりこめるようになったものの、いまだにその規模・形態等は不明であり、多くの疑問点を残している。広野廃寺周辺は早くから開発が進んでいる地域であり、今後の調査には関係各位の多くの御理解と御協力が必要である。この点を切にお願いして本報告の最後としたい。

(註)

- 註 1. 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集 宇治市教育委員会 平成2年。
- 註 2. 「金比羅山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1965』 京都府教育委員会 昭和40年。
- 註 3. 「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1965』 京都府教育委員会 昭和40年。
- 註 4. 鐘方正樹「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』第41号 昭和60年。
- 註 5. 猿向敏一「宇治市一里山東古墳の須恵器」『京都考古』第44号 昭和62年。
- 註 6. 『伊勢田塚陶棺発掘調査報告書』伊勢田塚調査会 昭和48年。
- 註 7. 『宇治市史』第3巻 昭和51年。
- 註 8. 『宇治市史』第1巻 昭和47年。
- 註 9. 栗野 謨「宇治市広野庵寺発見の事情」『京都考古』第56号 平成2年。
- 註10. 器形・技法については奈良国立文化財研究所の分類を用いた。『平城宮発掘調査報告Ⅶ』『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所。
- 註11. 金子裕之「軒瓦製作に関する二・三の問題—川原寺の軒瓦を中心として—」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 昭和58年。
- 註12. 『史跡 高麗寺』山城町教育委員会 平成元年。
- 註13. 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』瓦編1解説 奈良国立文化財研究所 昭和49年。『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ』瓦編2解説 同上。
- 註14. 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集 城陽市教育委員会 昭和50年。
- 註15. 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集 城陽市教育委員会 昭和49年。
- 註16. 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市教育委員会 昭和62年。
- 註17. 「岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会 昭和62年。
- 註18. 「久世廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第4集 城陽市教育委員会 昭和51年。
- 註19. 註12文献。
- 註20. 「東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会 昭和62年。

Ⅱ. 池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要

1. はじめに

池山瓦窯跡は、宇治市菟道池山の丘陵南斜面で昭和61年の夏に発見された窯跡であるが、発見が工事中であったため、窯本体及び周囲の地形の大半はすでに消滅している。

宇治市における窯業遺跡は、宇治川東岸部の丘陵上に点在しており、現時点で9遺跡程が知られている。特に池山瓦窯跡の存する菟道地区周辺には、飛鳥時代瓦窯跡で国の史跡に指定されている隼上り瓦窯跡を始め、白鳳時代の大鳳寺創建瓦窯である宇治瓦窯跡（山本瓦窯跡）や平安時代の瓦窯跡と考えられる三室戸寺瓦窯跡などの瓦窯跡、飛鳥時代の須恵器窯である山本須恵器窯跡や奈良時代の須恵器窯である滋賀谷窯跡が知られ、窯業遺跡が密に分布する地帯となっている。窯業遺跡を分布踏査の表面観察によって確認することは一般的に難しく、この地帯には、なお多くの窯業遺跡が存在する可能性が高い。

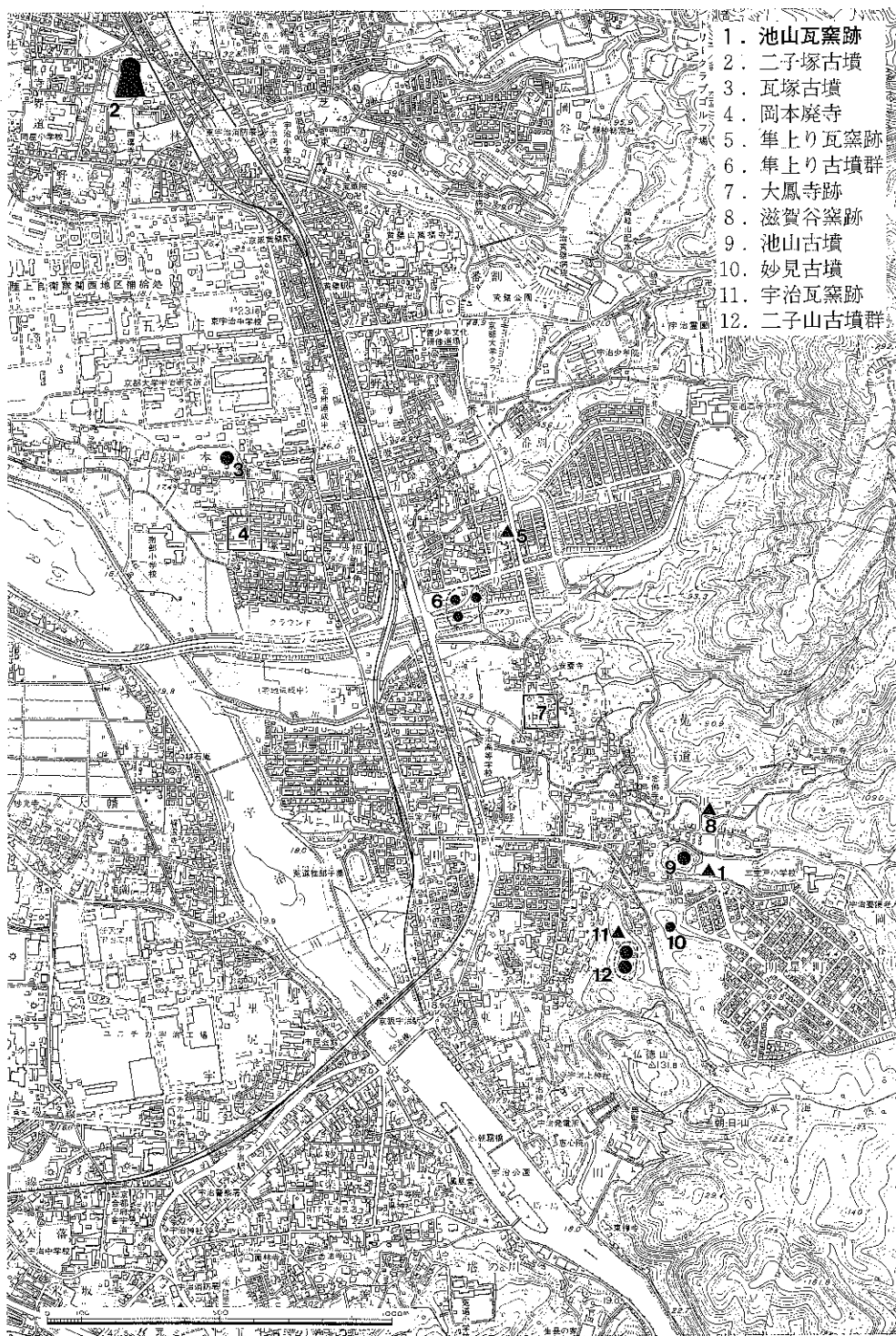
池山瓦窯跡は、昭和60年度に本市教育委員会が実施した分布踏査では確認できなかった遺跡であり、残念ながら工事中に不時の発見であったため十分な調査なく消滅した遺跡である。工事中に瓦窯跡より出土した瓦は、後述するとおり飛鳥時代に比定されるものであり、全国的に数少ない同時代の瓦窯跡がこのような状況下で消滅したことは、極めて残念なことである。

菟道地区を始め、その周辺地区での開発は昭和40年代より始まり、現在も宅地開発等が相次いで実施されている。今回の発掘調査は、このような当地区での開発進行状況を踏まえ、池山瓦窯跡の位置・範囲・年代等について、具体的資料を収集することを目的として、灰原想定地において調査を実施したものである。

調査の成果については、灰原そのものも過去における土地改変により消滅している状況が看取され、池山瓦窯跡についての新たな知見を得ることはできなかったが、なお周辺には築窯するに適当な丘陵斜面が残されており、今後、この部分において新たな窯跡が発見可能なことを把握できたことは、数少ない今回の成果の一つであった。

発掘調査の実施については、土地所有者である中川幹也氏を始め中川恵次氏のご協力をいただき、平成2年12月10日より17日まで現地調査を実施した。発掘調査面積は約50㎡である。

II. 池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要



第1図 池山瓦窯跡と周辺の主要遺跡

2. 池山瓦窯跡の発見と出土瓦

池山瓦窯跡は、幅80m程、比高20m程の西に延びる低丘陵の南斜面にあり、標高は55m程を測る。この丘陵の西端頂部には、直径40m程の円墳である池山古墳が存在している。

池山の丘陵北側には、西国十番札所三室戸寺の寺地が広がり、南側には明星町の閑静な住宅が広がっている。現在、池山の丘陵は開発が進行しており、池山古墳周囲の一部に自然地形が残るのみで、他の部分は大きく旧状を損ねている。

(池山瓦窯跡の発見)

池山瓦窯跡が発見されたのは、昭和61年9月のことである。三室戸寺駐車場造成に伴ってこの丘陵を削平中に焼土と瓦片が出土した。工事中の不時の発見であり、遺構は工事によって消滅したが、発見時の状況や出土品についてはその内容を知ることができる。

関係者の話を総合すると、工事掘削中に丘陵頂部に近い崖面で、幅1m程、長さ1m程の周囲が固く焼けた穴を発見し、その中から焼土と多量の瓦が出土したという。工事は、瓦片採集後に継続されたが、周辺では全く異常がなかったらしい。

遺構が発見された崖面は、かつて瓦粘土を採掘した時のものであるといい、古くより存した崖である。丘陵の他の部分でも所々に同様な崖があったらしい。

このような伝聞から、復元的に遺構の状況を考えると、工事中に発見された穴は登窯の煙道部分が遺存していたものと判断でき、このことより当遺跡を新たに池山瓦窯跡と呼称することとなった。

伝聞による限り、発見された瓦窯跡は煙道部のみ遺存していた1基であり、周辺の工事範囲内には他の窯の存在はなかったと思われる。現在、池山瓦窯跡の西側、池山古墳の南側部分には、築窯が可能な丘陵斜面が残っており、この部分での窯跡確認作業は今後の課題となっている。

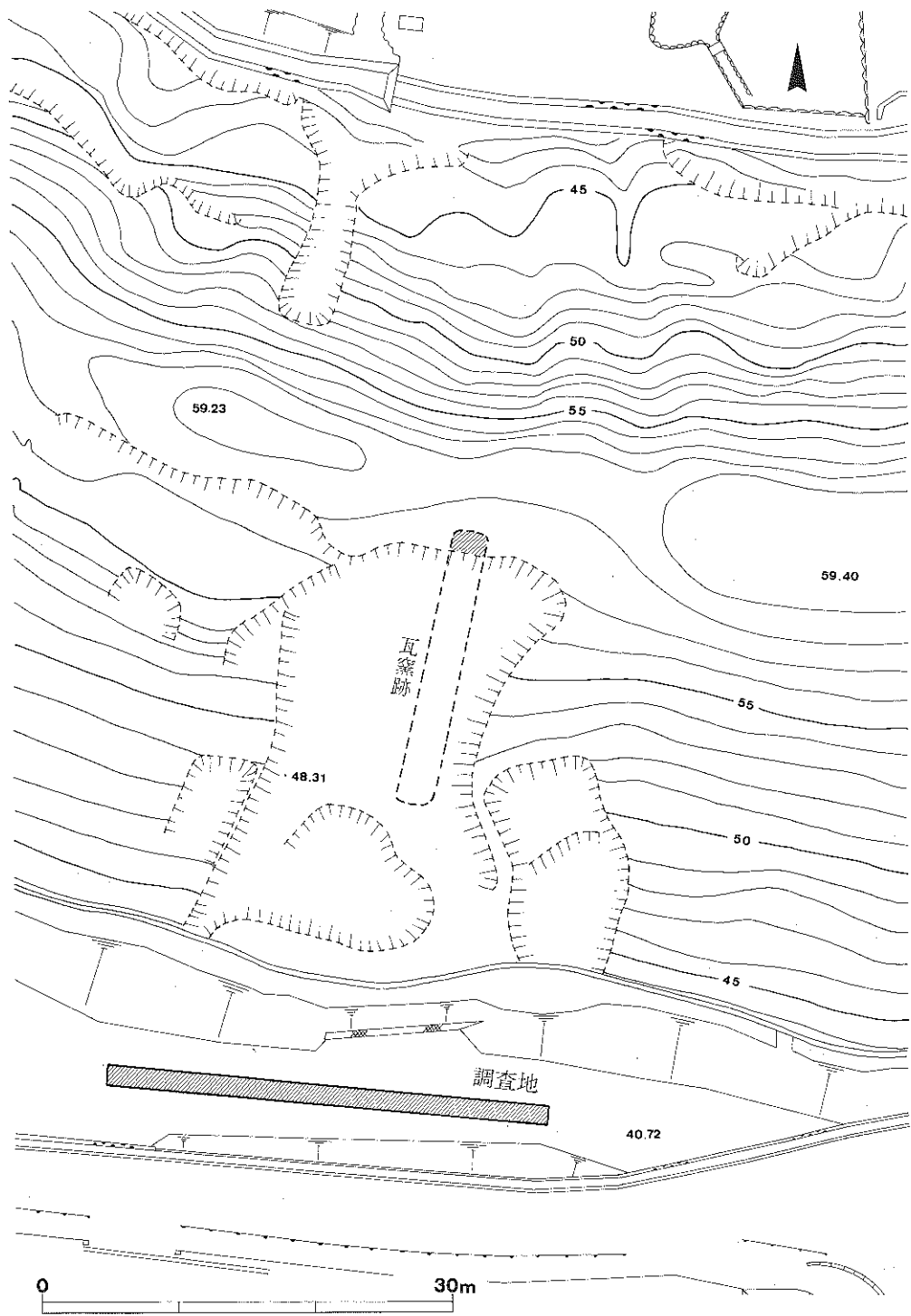
出土遺物の概要は後述するが、軒丸瓦はいづれも飛鳥時代に比定できるものであり、当瓦窯跡は、数少ない飛鳥時代瓦窯跡であることが判明している。

(出土瓦)

池山瓦窯跡より出土した瓦は、いづれも煙道内より工事中に採集されたもので、現在、軒丸瓦5点・平瓦2点が残されている。当時発見された遺物は瓦類だけであり、須恵器等の土器類はなかったらしい。

軒丸瓦(第3図)は、すべて同文様であるが、詳細に観察すると2種の範が存することが理解できる。これを仮りに軒丸瓦 Aa と Ab に分類することとしたい。

II. 池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要



第2図 池山瓦窯付近旧状地形図 (昭和61年)

2. 池山瓦窯跡の発見と出土瓦

軒丸瓦 Aa (第3図1・4) は、偏平な弁中央に稜線を有す8弁蓮華文を主文とするもので、中房には1+8の蓮子を配する。中房と弁とは独立しており、弁間に珠粒を持つ。所謂高句麗様式のものである。

軒丸瓦 Ab (第3図2・3・5) も、文様的には Aa と同一であるが、中房が Aa よりやや突出している点と蓮子の大きさが違う点の相違がある。

軒丸瓦 Aa と Ab は、同一範の彫りなおしの可能性もある。

軒丸瓦は5個体とも淡橙色に発色している。瓦当裏面の丸瓦と瓦当との接合部を観察すると、焼成時に丸瓦部が脱落した状況を看取できるものがあり、これらが生産地において遺棄されたものであることが理解できる。このように、遺物の状況からも当遺跡が瓦窯跡であることがわかる。

平瓦は、いずれも小片であるが、薄作りであり、凸面は丁寧なナデ調整が施されている。状況的に、平瓦も軒丸瓦と同時代の所産と考えるよい。

池山瓦窯跡出土軒丸瓦と同様な瓦を出土する遺跡に、^{註1} 隼上り瓦窯跡がある。隼上り瓦窯跡は、池山瓦窯跡の北方1kmのところにある飛鳥時代の瓦窯跡で、現在は国指定史跡とし公園化されている。

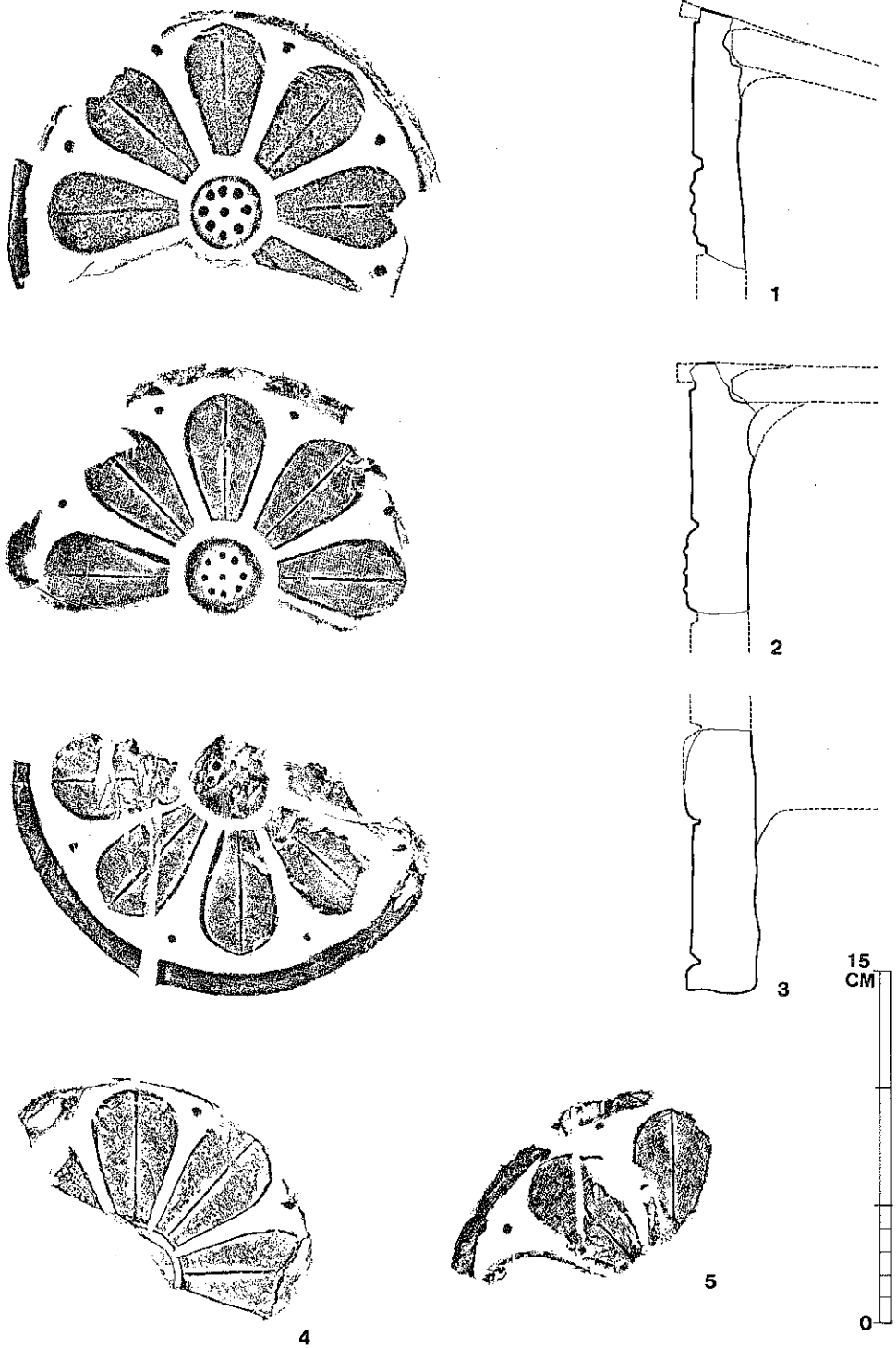
隼上り瓦窯跡より出土した軒丸瓦の文様にはAからE型式までの5種類が認められ、その内4種類は所謂高句麗様式と呼ばれるものである。隼上り瓦窯跡で生産された瓦は、豊浦寺(奈良県明日香村)に供給されたことが判明している。

池山瓦窯跡軒丸瓦 Aa については、隼上り瓦窯跡軒丸瓦 C 型式と同範であることが判明しているが、範の先後関係については、比較できる個体が少ないため不明である。

池山瓦窯跡出土瓦については、三室戸寺が保管の任を負っているが、現在は本市教育委員会に寄託を受けている。

池山瓦窯跡発見時の状況については、三室戸寺の伊丹敏彦氏より多くの教示をえた。感謝したい。

II. 池山瓦窯跡灰原想定地發掘調查概要



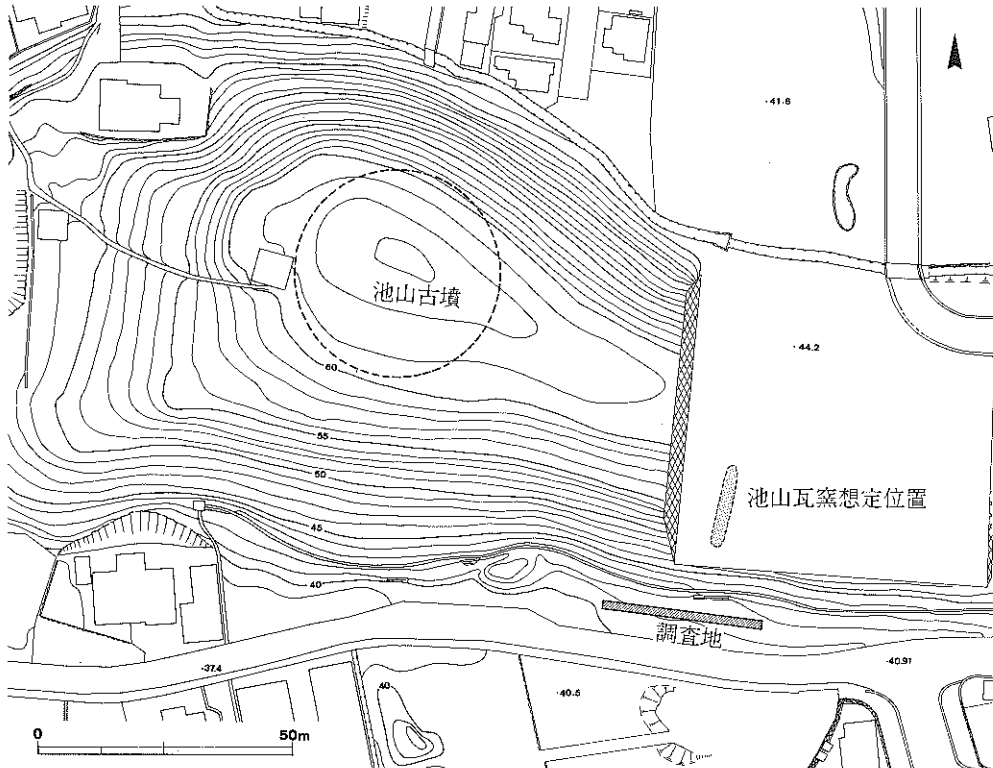
第3圖 池山瓦窯跡採集軒瓦実測図

3. 調査の概要

今回の調査は、池山瓦窯跡の実態解明のために実施した調査であり、かつて瓦窯跡が発見された丘陵裾部において、灰原等を確認することを主目的として実施した。

調査地は、丘陵裾と道路とはさまれた狭長な平坦地であり、地番としては菟道池山29にあたる。

調査は、この平坦地中央部に幅1.2m、長さ40mの細長いトレンチを設け重機による表土排除より始めた。土層的には、現地表下70cmまで現代盛土層が一面に広がり、その下に更に50cm厚の灰色粘質土等が認められた。当地は、以前に畑地で利用されていたといい、灰色粘土等は当時の畑地に伴うものらしい。その下は直ちに地山となっており、トレンチのどの部分においても旧地形の改変が顕著である状況を看取し得たので、当調査における灰原確認を断念し、埋め戻しを行なった。なお、遺物については一切出土していない。



第4図 調査地位置図

4. ま と め

調査の成果については、前述したとおりの結果となり、なお池山瓦窯跡の具体像は不明のままであるが、ここでは、現在知り得る知見より若干の考察を加えまとめとしたい。

現時点において、池山瓦窯跡発見の最大の成果は、隼上り瓦窯跡との間に同範を有することが判明した事実である。これは、隼上り窯跡が大和豊浦寺創建にさいして造営された瓦窯であることを考えると、池山瓦窯跡も同様に豊浦寺瓦窯であると判断できるからである。

豊浦寺は、蘇我氏が建立した飛鳥時代寺院であり、この寺を特色付けるのは当時余り例のない高句麗系文様を多用している事である。隼上り瓦窯跡軒丸瓦C型式及び同範である池山瓦窯跡軒丸瓦 Aa は、現在、豊浦寺でしか発見^{註2}されておらず、この点においても池山瓦窯跡が豊浦寺瓦窯であった可能性を示している。また、隼上り瓦窯跡と池山瓦窯跡との関係を瓦から見れば、生産地どうしの同範関係を有することとなり、両者はその生産活動において密接な関係をもっていたことがわかる。いうなれば、隼上り瓦窯跡も池山瓦窯跡も豊浦寺建立にさいして宇治に設けられた瓦屋の各窯場であったと考えられるのである。

このように考えると、宇治における豊浦寺への瓦供給体制は、かなり大規模なものであったと想定でき、これは従来の中では確認されていない程の生産体制が、遠距離の瓦窯においても瓦伝来から間もない頃に確立されていたことを示しているように思える。

我国における初期の瓦生産体制や寺院建立の実態については、まだ不明な点が多いが、今回の池山瓦窯跡の発見は、これらの問題を解明する有力な手懸りとなる。

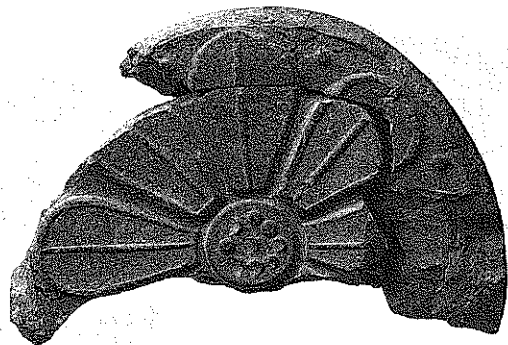
池山瓦窯跡の具体的内容については、現時点において明確にし得ないが、この瓦窯発見が提起した問題は大きい。今後、周辺部分の更なる調査の必要性を痛感する。

(註)

註 1. 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』

宇治市教育委員会 昭和58年。

註 2. 豊浦寺からは、この文様の瓦の出土は少なく、やや気がかりである。現時点において、他寺院ではこの文様が見受けられないところから、当面、豊浦寺への供給として判断しておきたい。奈良国立文化財研究所大脇潔氏のご教示。



第5図 隼上り瓦窯跡軒丸瓦C型式